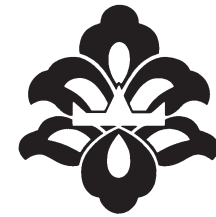


関山

かんざん

第9号



寺報 中尊寺

〈発行 中尊寺〉

寺報ぐらびあ	
生きた「まんだら」——中尊寺菊まつり	2
貫首 千田 孝信	12
故藤島亥治郎先生を偲ぶ会記念講演	
「建築家藤島亥治郎先生 平泉へのまなざし」	
大矢 邦宣	16
私の「九月」——歴史文化財講座のあとさき	
佐々木邦世	23
植村和堂先生を偲んで	
破石 澄元	30
〔論考〕	
なぜ、中尊寺の山号は「関山」か	
——中尊寺成立の前史を探る——	
菅野 成寛	33
〔ラビア解説〕	
植村和堂氏御奉納の金銀字経	
研究／出版	41
風信／語録	43
関山句囊	46
中尊寺讚衡蔵第一回館蔵品展	48
「中尊寺の三種一切経」展(回顧) 北嶺 澄照	51
陸奥教区宗務所報 第二部 中尊寺関係	56
執務日誌抄	59
御奉納者御芳名	66
浄財御奉納者御芳名	77
不動尊篤信御奉納者御芳名	78

〔表紙〕

中尊寺新能「二人静」

内田成信師・佐々木多門師

(撮影・内海)

〔扉〕

『中尊寺一字金輪像』

平山郁夫画伯奉納

——後記——

▽師走に入ってから、北朝鮮の拉致事件、イラク問題をはじめとして、ニュースは混乱する現代社会を取り上げた話題が多いようです。

▽奉納された絵馬に「世界中から不穏な動きがなくなり、皆が幸せになれますように」とありました。新しき年が、どの人にとっても「自利利他円満」な年でありますように。

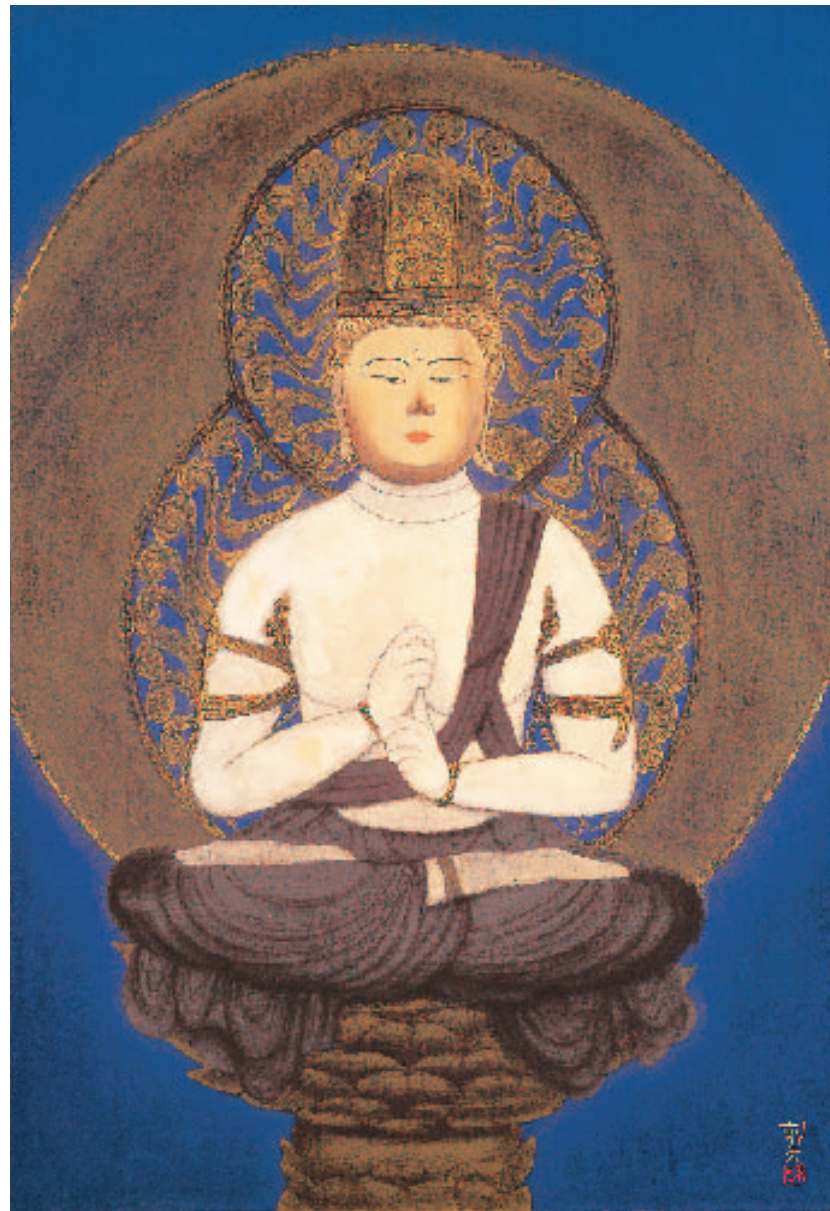
▽講演録を掲載させていただいた大矢邦宣氏をはじめ本誌発行に御協力いただいた方々に感謝申し上げます。

〔北嶺澄照〕

中尊寺〈寺報〉「関山」第九号
平成十四年(二〇〇二)十二月二十日
発行 中尊寺
(執事長 佐々木邦世)
〒〇二九-四一九五
岩手県平泉町字衣関二〇二
編集 中尊寺仏教文化研究所
印刷 川嶋印刷(株)

中尊寺四季の写真コンテストより

中尊寺の四季折々の風景や、人と人との心豊かなふれあい、永い間育まれてきた歴史・風土・郷土芸能・祭り・文化などを対象としている「中尊寺四季の写真コンテスト」より中尊寺貫首賞3点を紹介する。



平山郁夫画伯より奉納された『中尊寺一字金輪像』
(4月27日から9月23日まで讃衡蔵で公開した)



〈右上〉「菊まつりの日」

紫波町高橋国男氏、平成12年11月3日撮影。

〈上〉「木漏れ日」

一関市武居節子氏、平成11年11月13日撮影。

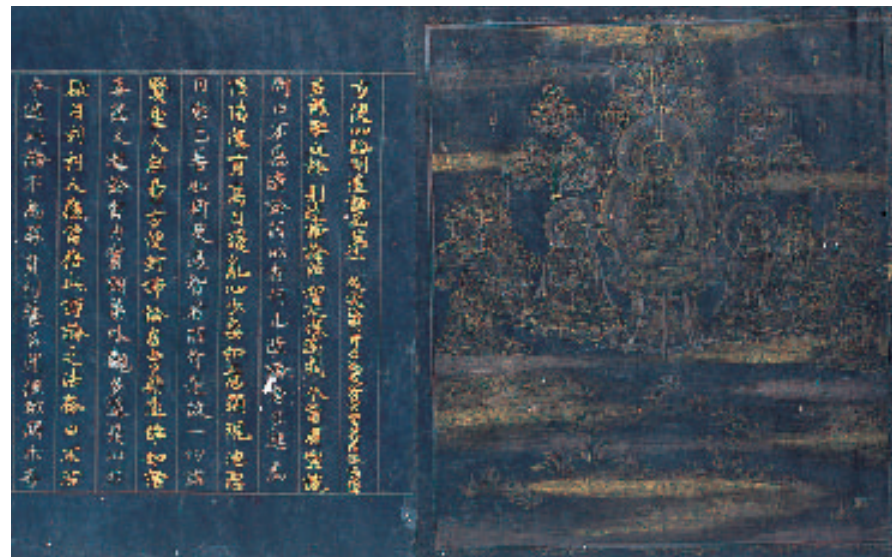
〈左〉「一休み」

東和町小菅 隆氏、平成6年11月1日撮影。





台風21号の強風で金色堂前の老杉が倒木(10月1日)



植村和堂氏奉納の金銀字経(平成14年6月9日)
紺紙金銀字交書経「方便心論」(見返絵及び巻首)

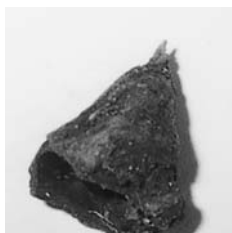


BO判特大ポスターを作成(9月1日)



貫首、泉流寺徳尼公廟を参拝(11月17日)
徳尼公は秀衡公の妻とも妹とも称される方で、藤原氏滅亡後に家臣36人とともに酒田へ逃れたという。ご縁のある地を貫首が訪問された。写真はお祀りされている徳尼公坐像。

(記事は本誌〈風信／語録〉に)



大池跡発掘体験 3月17日

大池跡での発掘体験。貫首をはじめ一山の子供たち、おかあさん方が挑戦した。上の写真のようにハスの果托（右上）の断片や菱の実（左上）が出土した。



桜花のもとでの花まつり

4月14日

4月の第2日曜日におこなわれている花まつり。桜花のもとでというのは初めてのことであった。



平山郁夫画伯来山
4月27日
平山画伯が来山され、奉納された「中尊寺一字金輪像」の開眼法要に参列、金色堂を参拝された後に平泉小学校で講演をされた。



春の藤原まつり
能「西王母」 5月5日

札幌市立太平中学校来山

5月26日

規制緩和により今年から札幌市立中学校が修学旅行で中尊寺を参拝できるようになった。最初に来山した太平中の生徒を執事が案内した。



世界遺産塾 6月22日

世界遺産塾に参加している子供たちが、かんばん亭で体験学習をおこなった。

紫波四ッ堰鹿踊来山

8月24日

施餓鬼会への奉納のために遠方の紫波町から初めて来山された。



カナダ大使夫妻来山
9月15日



天台宗一斉托鉢 10月12日

ボイスフォーラム
in 平泉2002

11月9日

かんざん亭を開場に開催。県内在住の外国人が母国の世界遺産を紹介。世界遺産塾の子供たちも発表をおこなった。





10月1日の夜に襲来した台風21号、中尊寺では強風により金色堂前にあった樹齢約300年の杉の巨木が倒れた。深夜の倒木のため人的被害がなく、金色堂にも被害が及ばなかったことは不幸中の幸いであった。

この事態に寺では金色堂前の樹木について緊急の樹勢診断を樹木医の方に依頼し、現状の把握に努めた。

2回実施した樹勢診断の結果、2本がいつ倒れてもおかしくない危険木と診断された。寺側では、最終的に「危険部分の上部を除去し倒木を防ぐとともに、根元から8~11m程度を残して景観の激変を避ける」との判断をし、12月初旬に作業を実施した。

今回、金色堂前の景観がかなり変化したわけだが、今後の景観形成については各方面からご助言をいただきながら慎重かつ真剣に対応を考えていきたい。

◀作業後の写真（12月7日撮影）
矢印から上の部分が除去された。

中尊寺が首都圏などに張り出す特大ポスター。「金色」からイメージ転換を期す

一瞬で記憶に残る 中尊寺

中尊寺事務所の千葉快俊総務次長は「秋なので紅葉の中尊寺（こうすゑ）もあったが、一瞬で記憶に響く構成にした。イメージ一新によって参詣者の減少傾向に歯止めをかけた」と反響を期待している。

特大サイズのポスター作製

平泉町の中尊寺・千田孝信（僧官）は、新しいイメージづくりを狙いに特大ポスター（縦103cm、横146cm）を五枚枚作製、四日から船外に発送を始めた。近く首都圏、名古屋、福岡のJR主要駅に張り出す。

金色を基調に右側半分に金色堂中央壇の増長天立像を金色で大きく配置。左側下部には山門と同じ書体の「中尊寺」を大書した。同寺の看板とも異なる「金色堂」は隅に小さく置き、イメージチェンジを図る構成だ。

中尊寺事務所の千葉快俊総務次長は「秋なので紅葉の中尊寺（こうすゑ）もあったが、一瞬で記憶に響く構成にした。イメージ一新によって参詣者の減少傾向に歯止めをかけた」と反響を期待している。

中尊寺では過去にも多くのポスターを作成してきたわけだが、B0判（縦103cm、横146cm）という特大サイズを作成するのは今回が初めてのことである。

金色堂中央壇の増長天立像が大きく写し出されているが、これはこのポスターを作成するために特別に撮影したものである。

10月には首都圏・名古屋・九州福岡の主要な駅に張り出された。

（岩手日報9月5日付の紙面でも左のように紹介された）

中尊寺ハスの株分け



今年の中尊寺ハスの生育が早かったため、事前に株分けしていたものを鉢植えにして差し上げた。写真は栽培について熱心に質問される紫波町の方々。

本年5月、中尊寺とご縁のある2箇所に中尊寺ハスが株分けされた。

北上市和賀町の多聞院伊沢家住宅（重文）前池に株分けしたのは5月10日。付近には奥州藤原氏の文化を担ったと伝承される古道「秀衡街道」がある。公民館と自治会の方々が「秀衡街道」を顕彰する活動の一環として希望されたのに応えてのことだった。

紫波町の五郎沼薬師神社への株分けは5月28日。紫波町日詰は奥州藤原氏の一族比爪氏の館跡があり、比爪氏ゆかりの五郎沼がある。また、以前から五郎沼薬師神社の祭礼には参拝者が寺から出向く等の交流があり、株分けの要望に応えてのことであった。



五郎沼近くの新たに整備されたハス池で中尊寺ハスは順調に生長し、8月5日にみごと開花した（8月6日撮影）



株分け直後の多聞院伊沢家住宅前池の状況。中尊寺ハスは順調に生長を続けたが、7月10日の台風6号の強風で立葉が傷んだため花はつかなかった。来年の開花に大きな期待が寄せられている。

平泉町名誉町民

故藤島亥治郎先生を偲ぶ会

10月27日



偲ぶ会に先立って追善回
向法要が中尊寺でおこな
われた。



中央で合掌されているの
はご子息幸彦氏。



偲ぶ会の記念講演は
大矢邦宣氏。

生きた「まんだら」

——中尊寺菊まつり

貫首 千田孝信

中尊寺菊まつりは、協賛会の熱誠溢れるご協力を重ねて、今年、十七回の年輪を教えた。

こよなく菊を愛し、菊づくり親しむ愛好者たちが、多年磨きあげた腕を振り、朝夕丹誠をこめて仕立てた菊の花鉢が、折からの樹々の紅葉の彩りを背景に境内一杯に奉納され、全国から来詣した観光客の目を楽しませてくれる。「菊まつり」は「秋の藤原まつり」の一環でもあり、毎歳十一月二日には、関係者が結集して、本堂のご本尊に菊を手向ける「菊供養」の法要が営まれる。

山門の前には懸崖けんがいと盆栽ぼんさい、本堂回廊には大懸崖、本坊表玄関には千輪せんりんと七本・十二本盆養の大輪、参道には三本立の花数百鉢が奉納されている。黄の「精興右近」・紫の「兼六香菊」・白の「国華越山」・管物くだものの「泉郷富水」等々、花の名も奥ゆかしい。地元平泉、衣川、前沢、胆沢、水沢、花巻、盛岡の菊愛好会の奉納コーナーが並ぶ。一関、花泉、藤沢、大東、千厩のかまち框が続く。宮城県からは大郷、岩出山からの奉納もある。平泉小の児童と平泉町文化財愛護少年団の出品も一郭を占める。いずれも「一手かければ一に咲き、千手かければ千に咲く」菊の生命力に寄せる慈愛の燦然たる結晶である。

本堂からは、仏徳を讃える声明しょうみょうが響き、天台宗福聚教会の詠讃衆の歌声が流れる。藤原まつりの初日には、この菊の花道を、晴着を着飾った稚児たちの行列が通る。堂前の広場では、跳んだり撥ねた

り、懸命にお神楽を舞う子供たちの瞳が、ひととき澄んで美しい。能舞台では、「枕慈童」あるいは「紅葉狩」、今年には「経政」が幽玄に上演されて、肩越しに観る客もいる。「慈眼視衆生 福聚海無量」この妙文を菊の葉に」と、朗々の謡が杉木立に飮する。木の間がくれには、腰を屈めて焦点を定める写真愛好家がいる。

そうだ、これこそ生きた「まんだら」（曼荼羅）ではないか。「まんだら」は、描かれた仏画だけではない。

「まんだら」には、聖なる中心がある。それは大日如来。天台の教理では、大日如来は、すなわち阿弥陀如来であるから、「まんだら」の中心は、本堂・金色堂の阿弥陀さま。そして、そのご遺体を如来に託した藤原四衡公の御霊である。

境内参道に奉納されたあまたの菊花は、仏徳を讃える無量百万の華鬘菩薩たちだ。境内の樹木を彩る紅葉は、仏徳を讃える無量千万の散華菩薩たちだ。それぞれの地域別の框に分かれ、あるいは自然な位置を占めて、聖なる中心を圍繞するかたちで、美しい調和を保って荘嚴の風光を構成している。

「まんだら」の内奥の中心に向かって、その菩薩たちの悉くが、「いのち」の健康と長寿の祈願を凝集し、聖なる中心からは、尊い「いのち」と「ひかり」の恵みを、外に向かって分化普及する。

「まんだら」は、「聖域・道場」をも意味する。関山という藤原文化の「結界」に結いあげられた美しい集会所が、「菊まつり」である。この結界を守る杉木立も、当然、「まんだら」を圍繞する環境菩薩たちだ。行列を組んで金色堂に参詣する詠讚のご詠歌衆も、稚児たちも、お神楽を舞う踊り子も、「まんだら」を構成する貴重な歌舞菩薩たちではないか。

「千手かければ千に咲く」と、目立たない蔭で菊を作る仕立師も、朝に夕に箒の目を正して境内を清掃する人々も、みな「まんだら」を莊嚴する下座行の菩薩たちだ。菊や紅葉を嘆賞しつつ、金色堂に来詣する全国からの参詣客も、また、「まんだら」の莊嚴を彩る合掌菩薩たちだ。

「まんだら」は、天と地と人の一切を包摂し、しかも、美しい秩序を保ちつつ個性の美を発揮する調和と共生の小宇宙である。一輪の菊花も、紅葉のひとひらも、菊まつりに参加するすべての大衆も、みな、「まんだら」の中心におわします大日如来の「いのち」と「ひかり」と「ひかり」の尊い顕現なのである。

大日如来は、すなわち、日輪・太陽の「いのち」と「ひかり」の象徴である。太陽の偉大なる光と熱こそ、われわれの「いのち」の聖なる根源、さらに地球大地の土と水もまた、われわれの「いのち」の聖なる環境、そして再びそこへ還帰する「いのち」の故郷である。

われわれの「いのち」と「こころ」は、すべて、天地宇宙の「地・水・火・風・空」の五つの大きな要素、「五大」の不可思議な力の和合によって生まれ、相互関連の網の目、因縁のなかに生まれきたり、生かされ合っている。われわれは、すべて、その壮大なる関連「まんだら」の真つただなかで、苦楽、よろこびと悲しみを共にする菩薩たちではないか。これこそ、自然と人間が織りなす調和と共生の莊嚴な絵模様、生きた「曼荼羅」の世界である。

人は誰でも、心の中に、冒してはならない自分の「結界」「まんだら」を持たなければいけない。「曼荼羅・まんだら」とは、人それぞれが、生涯を賭けて築きあげる人生観、世界観、宇宙観の、夢の絵模様である。この世を地獄図絵にしてはいけない。この世を「曼荼羅・まんだら」の世界に莊嚴

しなくてはいけない。

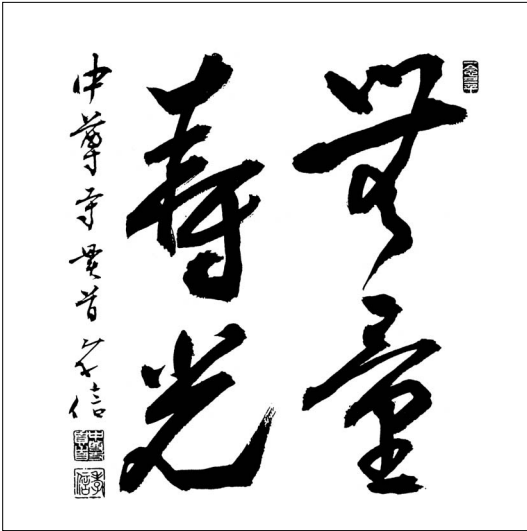
関山という藤原文化の「結界」^{けっかい}に結い上げられた、この菊まつりの小宇宙を、俳句に詠みこむ詩人もいる。すべては、曼荼羅の荘厳のなかに聖なる位置を占める担い手、菩薩たちなのだ。

枝摘みて摘みて仕上げる仕立菊

榊原和雄

菊供養過ぎし風なり中尊寺

岩淵英子



無量壽光^{むりょうじゆくわう}

菊一輪の花のいのちは不思議ないのち。

この花のひかりは不思議なひかり。

無量の過去から無量の未来へ無量につづく

いのちのひかりです。

ほとけから賜った不思議のいのち

ほとけから賜った不可思議のひかりです。

南無 無量壽光！

故藤島亥治郎先生を偲ぶ会記念講演

「建築家藤島亥治郎先生 平泉へのまなざし」

大矢 邦宣

七年前のことです。平成七年（一九九五）一月、県立博物館で「平泉寺院の荘厳をめぐる」というシンポジウムがあり、亥治郎先生に「平泉の寺院建築について」と題して基調講演をお願いしました。先生はそのとき九十六歳、さすがにこころもち前かがみ気味になって歩いておられたので、思わず声をかけました。

「先生、杖は使われないのですか?」。

「杖? そんなジジ臭いことができるか!」

一瞬あ然としました。九十六ならおつりが来るほど立派な爺いなのにと。そしてすぐ納得しました。そのようなダンディなお気持ち、いつまでも先生の感性を保ち、さらには明晰な頭脳と情熱

を保つ原動力なのだと悟ったのです。

さて、本日の演題を「建築家・藤島亥治郎先生 平泉へのまなざし」とさせていただきました。

「建築家」とは、先生が好んで使われたご自身の「肩書」です。先生は学者と呼ばれることを嫌っておられました。自分は「建築家」である、芸術家である、という強い自負がありました。

平成九年に出された五冊目の随筆集『白寿春秋 花なりき』の序文に次のように記されております。

「(自分は) 建築史家だが、これでも芸術家のつもり。好んで画作や写真に耽り、駄文を綴り、自然、特に花を愛し、暇を見つけては世界を旅した」。そして「建築は総合芸術」とも話されております。

先生が晩年に設立された研究所を「綜芸文化研究所」と名付けられたのは、おそらく「建築は総合芸術」ということからだろうと推測しておりましたが、先程幸彦氏に確認したところその通りであるとのことでした。

本日お話致しますのは、その総合芸術家としての観点と感性から、平泉文化の調査と保存に向け

られた先生の「まなざし」についてであります。

さて、「芸術家」としての先生の感性が育まれたのは、何といってもお父さんである藤島静村画伯の資質を受け継ぎ、その影響を受けられたことによるのと言うまでもありません。

先生は明治三十二年（一八九九）五月一日盛岡に生まれましたが、その直後一家をあげて東京に移住され、浅草で育たれました。一家をあげて上京したのは、父静村さんの画家修業のためでありました。藤島家の家業は「南部家御用の飴屋」だったようですが、静村さんはそれを嫌い、盛岡藩円山四条派に連なる川口月村のもとで修業していました。上京した静村さんは上野の美術協会に属し、本格的な画家としての道をスタートされたわけがあります。先生は子供の頃を振り返り「あの頃の父の思い出が一番懐かしい」と記されております。しかし、静村画伯は寺崎廣業（東京美術学校教授）と並び称されるほど将来を嘱望されながら、東京での画家としての出世の途を自ら絶ち、「旅の画家」にならざるを得ませんでした。その理由は二

人の息子が非常に優秀だったからでした。

長男の信太郎さんは東京大学を卒業後、営林局長、高知大学教授になり、そして次男の亥治郎先生も東大の建築学科に進まりました。静村画伯は、優秀なお子さんの学費と生計のために「旅の画家」になったわけです。画伯は北陸、関西、盛岡、花巻、二戸、八戸と転々とし、八戸滞在中に発病され、昭和十年（一九三五）に亡くられました。

「旅に出ても父の画業は決して他の名のある画家に負けていない。ことに筆勢の素晴らしさは他人を凌いでいる」と、亥治郎先生は静村画伯を評されております。

さて、お父さんから受け継いだ芸術家としての資質に磨きをかけたのは、先生が大正十五年（一九二六）、二十七歳の時になされた最初のヨーロッパ旅行であります。今「留学」ではなく「旅行」と申し上げましたが、実は、そのスタイルはいかにも先生らしく、「留学」よりは「旅行」という方がふさわしいものであったからです。

第一に、他人の真似をしない。当時は新潮流の

ドイツ留学が流行していたそうですが、ならば自分はフランスへ、とフランスを選んだ理由を語っておられません。真似をしないこと、これは芸術家にとってもっとも大切なことでありましょう。

次に「見て感ずることが大切」として、大学の聴講ではなく、パリをはじめ三十ほどの都市を見て回ることに徹したことです。「見て何かを感じること、それがものを作ることの根源」との信念からでした。

パリにはシヨンゼリゼ劇場など、鉄筋構造をいち早く採用した現代的デザイン構造の代表建築もありました。先生が驚くべき記憶力と色あせない感覚で七十年後にまとめられた紀行エッセー『ラ・フランス・ロマンティック』には、「都市や建築などの造型や劇・音楽までを師とし、人々を友として生活ぶりを聞き、見て歩いた」とあります。

地方への旅ではシャトー(居館)に特に心をひかれ、建築様式と歴史、自然、さらには文学にまで総合的な関心を示しておられます。

お父さんから画家としての資質を受け継がれた先生は、丹念なメモとともにたくさんスケッチをされ、パステルでも描いておられます。写真も好きでたくさん撮っておられました。

先生がフランスで感激されたことの一つは、美術展のジャンルに、絵画・彫刻・工芸と並んで、日本の展覧会にはない「建築・都市計画」部門があったことでした。フランスの「都市計画」とは、経済や技術、防災等を主体としたタウン・プランニングではなく、「造型的考慮を容れた」ユルバンズムであることに注目されています。つまり、都市計画とは芸術の一分野であることが認められていたのです。

また、復興へのあり方についても参考にすべきことがありました。パリ北東のランスの大聖堂はみごとに彫刻が建物の前面に施され、建築であると同時に彫刻作品でもありました。しかし、当時は第一次大戦で徹底的に破壊されていたのです。それから六十年後に再訪されたとき、「ランスの微笑」と讃えられる聖女の彫刻の細部までも完全

に丹念に復元されていることに深く感銘を受けておられます。

先生はこの「留学」のときパリを起点としてヨーロッパ各地へ精力的な旅をされていますが、古典の美への造詣を一層深められたのは、「建築を美術と風土と共に見てまわった」と『ギリシア建築紀行』（一九九〇）で述べられている、昭和二年（一九二七）のギリシャ旅行でした。

憧れのアクロポリスの丘の印象記は文学的香りに包まれています。

「夕陽を受けて薔薇色に染まったアクロポリスパルテノンの姿は果たして現実のものか、まぼろしか。否否、神の成す美の結晶としか思えない。我を忘れて見続けたこの数刻は生涯鮮やかに臉の中に残り続け、決して消え去らぬであろう……岩盤に腰を下ろして、闇が足下に忍び寄るまで、こうして神の造形した岩と建築とを一体と見て、神の息遣いを私も共にしたのである……」

それだけに六十年ぶりに再訪したときの幻滅感は一ひとしおだったようです。

「生涯にまたと逢わぬこの感激を、あれから半世紀を経た今、この日もひたり切れると思ってきました。一九八八年の再訪の日に。幻滅！ この言葉をこの今ほど痛く受けたことはない。この荒野、荒原はどこに行った。すべての丘、すべての野は完全に緑林緑野となり……アクロポリスは間違いなく紅色に染まるだろうが、花咲き緑茂る現代の宅地からでは、あの日の感激は起こるまい。落胆した……」

史跡と環境との一体空間の大切さを力説されてこられた先生らしい美的感覚かと思えます。

さて、先生と平泉との出会いは、昭和四年（一九二九）夏、三十歳の時でした。東京大学の助教として学生指導のため訪れたのです。

東京大学に移られる前は、大正十二年（一九二三）から十五年の洋行まで京城高等工業学校の助教・教授をなさっておられました。先生が京城高等工業に奉職されたことは、平泉にとって大変有意義なことでした。先生は特に新羅の遺跡や建築遺構あるいは都市遺跡を研究され、学位請求論

文はその研究による『朝鮮建築試論、特に慶州郡を中心とする新羅時代仏教建築について』というものでした。このときの経験、学問的蓄積が、先生の平泉研究の基礎になりました。昭和二十年代の初め先生は平泉村の地籍のトレースを始めましたが、これは新羅慶州の条里を求める調査経験によるものでした。

「何が金色の美を造らせたか、その時代を知りたい、人を、遺跡を知りたい。遺跡を呼び醒まし、復元してその本質に及びたい。史料を地上地下に求めて総合したい」「平安時代は四百年の長きにわたったのに建築遺構は少ない」。その平安期の建築遺構が平泉に眠っている、それが先生の推測でした。

昭和二十七年国による無量光院跡の発掘調査がありました。先生は正式な調査員ではなかったのですが、数日間調査に参加されました。果たして地下三十センチ程のところに遺構が完存していました。その規模といい形式といい、さすがに奥州藤原文化、平泉こそ十二世紀建築史を充足をさせ

る、先生は確信を得ました。

そして昭和二十九年（一九五四）秋、先生は「平泉遺跡調査会」を組織し代表に就任されました。五十五歳の時です。東大・京大・岩手大・立教大の研究者を集め、文部省の科学研究費を得て行う学術調査です。同年観自在王院跡の調査に着手し、翌年から三年間毛越寺も併せて調査、三十二年から四十三年まで中尊寺境内の調査、次いで四十七年まで柳之御所遺跡の調査を行い、活動を終えました。昨今の開発に伴う緊急調査ではありません。純粋な学術調査を二十年近くも続け、平泉の重要遺跡を次々と明らかにしました。この「平泉遺跡調査会」の活動こそ正に学術的平泉研究の原点と言えるものでしょう。

その間先生は、国宝金色堂保存修理工事業や観自在王院、毛越寺の整備事業の指導委員長を務め、遊水地建設に伴う柳之御所遺跡緊急発掘調査に際して設けられた平泉遺跡群調査指導委員会においても委員長を務められました。さらには中尊寺讚衡蔵や毛越寺宝物館および本堂、平泉文化史

館の設計も手がけられています。

先生の平泉に向けられた「まなざし」は、幅広い視野とすぐれた感性と美意識、そして東洋、西洋の遺跡への旅行から得られた歴史文化環境と芸術への深い関心に基づいたものでした。

十年前「岩手日日新聞」に連載され、このほど『東方に在り』第六号に再録された特別寄稿「史都平泉を検索する」の中で、先生が特に強調されたのは「史都人としての誇り」です。「史都平泉」の重要性を認識し、それに基づいた保存、開発を進めること、即ち「史都平泉」の住民としての意識、ことにも町当局の認識を厳しく問いたただされております。

「今意見を言わないで悔いを残すことになりませんか?」、平泉遺跡群調査指導委員会で委員長として自ら積極的な意見を言い、他の委員に発言を何度も促したとのことでした。

平泉研究を集大成された大著『平泉建築文化研究』において、先生は平泉の都市計画と遺跡保存について「百年の計をはかり、後年に悔いを残さ

れんことを」と述べ、基本的な提言を具体的になされています。

まず、平泉の特色は「水」であると断言されています。豊富な地下水、湧水、河川による「水の芸術」は京に勝るとも劣らないとし、苑地の都、親水公園化を提言しています。次に四つの史跡公園の整備です。毛越寺・観自在王院地区、金鶏山・花館廃寺地区、中尊寺旧境内全域、そして高館・柳之御所・加羅御所・無量光院・白山社・鈴沢池地区です。

そして十二世紀の古都の環境を大切にしたり都市計画・整備を行なうこと、周辺の自然環境を大切にすることです。

最後に、冒頭で触れた七年前の県立博物館でのシンポジウムの際のエピソードをご紹介しますと思います。

「いやあ、うまく納まったよ、できたよ」と喜色満面で見せてくれた図面がありました。何ごとならんと見ると、なんと「中尊寺建立供養願文伽藍」を大池地区に落し込んだ図面ではないですか。

これはその一カ月前に刊行されたばかりの『平泉建築文化研究』にも入っておりません。「左右二十二間の翼廊を持つ三間四面堂」と「反橋二十一間、斜橋十間」が納まりにくいとして苦心されていたのですが、「できた、本邦初公開だ」とはしゃいでおられました。先生は、建設工事は途中で中止したと推定されているのですが、大著を刊行されても、九十六になっても、考え続けておられるのだと感銘をうけました。

また、ある有名な先生が金色堂の荘厳について、具体的な技法を説明していたところ、突然先生が立ち上がり、「君、そりや違うよ！ あのとときはこうだったのだよ」と、とうとうとご説明なされました。その先生も六十歳ほどのその分野の大家だったのですが、九十六歳の先生から「君」と言われると、大家もあっさり兜を脱がざるを得なかったのです。それだけではありません。皆、その記憶力のすばらしさ、よどみの全くない頭脳の明晰さにびっくりしたのであります。

ある方の受け売りですが、平泉研究の二人の巨

人は相原友直と藤島亥治郎。相原友直は江戸中期に『平泉実記』『平泉旧蹟志』『平泉雜記』の平泉三部作により平泉の全てを集成し、平泉研究の基礎を築いた人です。その友直と亥治郎先生、このような総合的な目と知識を持った人はもう出ないだろうというのです。全く同感です。

平泉はまさに大切な人を失いました。しかし、先生の「まなざし」は、暖かく、厳しく、きつと浄土から注がれているに違いありません。その先生の「まなざし」を意識しながら、平泉文化の保存、整備、活用に努力することが、おのずから世界遺産への道でありましょう。

あと二年後の二〇〇四年は、「平泉遺跡調査会」が発足してちょうど五十年に当たります。いかがでしょうか、それを記念して亥治郎先生の銅像を造り、平泉を見守っていただき、そのような提案をさせていただいてお話を終わります。ありがとうございます。

（岩手県立博物館首席専門学芸員）

私の「九月」

——歴史文化財講座のあとさき——

佐々木邦世

ためらい

今年から大学の文化財講座を引き受け、九月にIP（集中講義）で学生諸君につきあうことになった。講義は九月からであったが、青山の、根津美術館の館蔵コレクション古写経展の期間が八日までだったので、前日早く上京した。

「写経——深遠なる信仰の世界」、街の喧騒を遮断し、寂とした中での展観である。長屋王所願の神亀経や、聖武天皇勅願一切経、また光明皇后御願の「五月一日経」といった天平経の謹厳端正な書風。紺紙に厚い銀字が、いまだ輝く「二月堂焼経」。紺紙金銀字交書の「中尊寺経」に金字の秀衡経も、たしかに在った。いつの頃か、高野山から巷間に出たものが収集されたのであろう。天平から平安と、写経史上の至宝を眼前にして、ひたすらな信仰の心と形に触れた思いである。「二月堂焼経」からは、以前、書家・

中村素堂先生のお宅に伺って拝見した日のことなど想いが繋がってくる。

少しためらいながら、階をのぼって石像の室に向かった。あの、如来像や菩薩石像の頭部が、やはり陳列されていた。中国山西省の天龍山石窟（第十八窟東壁）、その中尊の首を切断したものである。菩薩の頭部も、侍立していた砂岩像を切断して日本に持ってきた、いわば物証である。

二十年も前になるが、中国仏教研究者訪中団の一員として山西省大同の雲崗石窟から太原、河南省洛陽の龍門石窟・鞏県石窟寺などの仏教遺跡を訪ねた。内陸部はまだ十分に開放されていなかった当時であったが、中国仏教協会のはからいで、当初予定になかった天龍山参観が許可された。太原市から、特別に用意された軍のジープ一〇台を連ねて天龍山に至り、山頂から石窟に降りた。そこで私達が目にしたのが、首から上を削り取られ、顔の無い石像である。

「この像の頭部は、どうしたのですか」
歴史上に知られる廃仏（三武一宗の法難）などを想定して



菩薩像頭部

(唐時代 天龍山石窟『根津美術館藏品選』より)

口を挟んだ私のこの質問は愚かであった。案内を兼ねた通訳の馬さんが、こちらを吃と睨んで言った。

「日本に帰って、東京の博物館・根津美術館に行ったら見られますよ。日本帝国主義が削って持っていった」吐き捨てるようにそう言われて、返す言葉がなかった。

削られた石仏の、首の部分が無惨であった。



沈海駒先生

外に出ると、山の斜面に櫓がみえた。大きな石像の頭部を補修している最中であった。巻尺を出して測ると、足元から首まで四メートル。団の一行から遅れるのを気にしながら見ていると、麦わら帽に画板を手にもった現場主任らしい方に会った。差し出したメモ用紙に「浙江美術学院雕塑 沈海駒」と署名してくれた。画板を見せてもらうと、B4版くらいの写真が貼ってある。破壊される前の十一面観音像だったが、大分前に日本で出版された古い図版の複写である。

「修理の資料は、これだけです」

沈氏は私の求めに応じ、石像と同じ石片を預けてくれた。

帰ってからすぐ、その石を東京国立文化財研究所の石川陸郎さんのところに持って行って沈先生との出会いを話した。国立科学博物館の地学研究室の松原聡氏が、石を薄く切断して調べてくれることになった。調査の結果は、「ほとんど石英の砂からできており、少量の長石と方解石を含んでいる。長石は多分アルカリ長石と思われるが、分解して一種の粘土鉱物になっている」との報告であった。

私は、『美術院紀要』など石仏修理に参考となるような



天龍山石窟

資料数冊を集め、石片の調査結果とともに郵送した。

沈先生から、「有益的作用、対此 深表感謝 握手」と礼状が来たのは、ほぼ十ヵ月後であった。今とは違って、当時はまだ文字情報には各管轄ごとにチェックがあつて遅滞したのかも知れない。

美術館のその如來と菩薩の頭部は、ともに盛唐期の像に特有の充実感溢れる容貌である。

解説には「請求」と書いてある。お願い願って貰い受けたの意味である。が、あのとときの馬さんがわれわれに言ったことが事実であれば、真相は買収とか軍による接収とか、いずれ強制的な移管であつたろうことは想定されよう。

根津に来てこの仏頭が視野に入ると、いつもあの天龍山での恥ずかしく、冷や汗が流れたときの思いが蘇ってきて、どうも気が減入る。それでためらつたのである。

文化財を読む

文化財にどう接したらいいのか——。講義のはじめに、「国宝を旅する前に」と題して西川杏太郎元奈良博物館長が

引用された英文『奈良京都案内書』を紹介した。

キリスト教を信ずるものは、多分、日本の仏教や神道を信仰することはできないはずである。諸君にとって異教だからである。しかし、仏教や神道が、まちがいになく日本の長い歴史を支え、日本人の心の大きな拠り所となってきた事実を尊重する心を忘れてはならないであろう。これが日本の寺や神社を訪ねるときの最も大切な礼儀である。門を入ったら姿勢を正そう。リラックスして楽しむのはほかの場所でのことにしたい。イギリスで、一般市民を対象としたガイドブックである。

さて、宗教に寛容（関心の希薄）なわが国の二十歳の諸君はどう受け止めただろう。

それから、明治の神仏分離、廃仏毀釈（きしゃく）の事情を話した。フェノロサと岡倉覚三（天心）が法隆寺夢殿を開扉した瞬間、秘仏は美術品にかわったことも話した。古社寺保存法の制定とそれに基づいた金色堂修理の経緯がいかなるものであったか、どういう失敗をし、それがどこに原因があったか。昭和の大修理にはどうだったか、の実例をあげて、文化財の保存管理には、その土地で直接係わってきた人の

声を聴くことがいかに大事であるかを語った。

「中尊寺供養願文」（重文）を読んだ。読むということは文字が読めるだけでなく、だれが、どういう意図で何を為そうとしたのか、その時代状況のなかで内容を読み解くことである。いえば、願王の深意を汲めるかどうかである。中尊寺の寺堂建立については、まず藤原清衡（すつき）の数奇な前半生を知らなければならない。そこで、『陸奥話記』を読む。征夷、征せられる側の、辺境の民の倫理。人間探求派といわれた俳人・加藤楸邨（しゅうそん）が「もうひとつのみちのく」を著し、押しやられていった人々への視座、そこを感じるものが大切である、と。

その上で、中尊寺経の淵源が、遙か中国の山西省五台山に繋がっていくことを話した。

大学の所蔵になる「二月堂焼経」を特に出してもらって、一人ひとり近づいて見る。このように稀少貴重なものに直面して、いかに注意して身を処するか体験させた。

朝から夕刻まで、集中講義は四日間つづいた。いつの世でも「このごろの若い者は…」といわれる世代。ともあれ、

よく、ついてきてくれたと思う。実際、内容は大学院の講義になってしまったかも知れない。が、彼らが多少、消化不良をおこしたとしても、単なる知識だけでない何かがあるのなかに残れば、それでいいと思った。

そして、講義をこう結んだ。

昔の、仏師はこの世の無常を身をもって知っていた。南無阿弥陀仏と唱え、救いを求め、切実な思い、素材をいとおしむ思いで仏像や荘厳しょうこんを作った。それを、芸術品として、ただ美術史のなかで捉えとらえようとするのは見当はずれである。

まず、仏像ならその仏像が元もと在った所に行つて拝み、その土地の山河、歴史をも含めて思いめぐらすことが、大事である。発願者や制作者だけでなく、それを朝夕に拝み大事にまもってきた先人達、そういう、ひとの気持ちを含んでわかることを教養きょうよう、というのである。

受講生には、自分で行きたい寺社でも博物館でも行って、彫刻・建造物を問わず、そこで実見した文化財について、それぞれ自分の所見をまとめレポートを提出してもらおうことにして、银杏のキャンパスを後にした。

非 戦

昨日は、米国同時多発テロから一年。九月十一日もどうやら大きな異変なく済んだようで、街にもなにかほっとしたような雰囲気がある。書店の店頭にも、全く飾り気のない白い本が積まれていた。大きな活字で『非戦』NO WAR。掌てにとつて捲めくつてみると、オノ・ヨーコや坂本龍一・辺見庸ほか、マハトマ・ガンジーまで、五十人の掌編を音楽家坂本龍一が監修したものである。印税は9・11の犠牲者とアフガン難民の支援にあてる、と小さく記してある。

たまたま開いたページに、「課題は、想像力の欠如」と題した逢坂誠二・北海道ニセコ町長の文があった。

：グローバル化によって、継ぎ目、縫い目のないシームレスな物流や価値の流れができるが、そのことが搾取しゆや押し付けを引き起こしているとも言えるのだ。

色々な考えや価値を持った方がいる。世界には色々な環境、境遇があるのだということ、こうしたことを思い巡めぐらす想像力が私たちには欠如している。この想像力の欠如こそが、今回の対テロ戦争の大きな問題だ。そして、お互いの「違いを尊重」すべきこと、もちろん

テロ行為を許してはいけませんが、また、一見正当に見える報復であっても罰せられるべきだと論じている。この稿は米国同時テロの五十日後の執筆である。

文化財難民

翌日、行くところがあった。上野の東京芸術大学の美術館で「アフガニスタン 悠久の歴史展」が開催されている。

二〇〇一年三月に起こったバミヤン石窟寺院の大仏破壊は、世界に大きな衝撃を与えました。この事件をきっかけに、二〇年以上に及ぶ戦乱によってアフガ



弥勒菩薩交脚像

(3-4世紀、ハッタ出土/マルローコレクション/『アフガニスタン 悠久の歴史展』より)

ニスタンの貴重な文化財の多くが失われ、傷ついているという現実が人々の知るところとなりました。……アフガニスタンはアレクサンドロス大王の東征や、シルクロードに沿ってギリシャ、エジプト、ローマ、ペルシャと、ヘレニズム文化・インドガンダーラ美術・イスラームと実にさまざまな文化の入り交じった「文明の十字路」であり、仏教東漸の主要な拠点である。しかし、今やその国土は荒廃し貴重な文化財は破壊され略奪され尽くした感さもある。そこで、遺跡発掘で収集されたもの、国外に流失したのもも集めて、この戦禍に傷ついた文化財の復興のために、パリのギメ国立東洋美術館で本展が開催され、そして今回、その支援に日本で巡回展示されたのである。

ユネスコ親善大使でもある平山郁夫芸芸大学長の声明には、皮肉にもユネスコ遺産条約に違反して、国外流失したので助かった文化財も多い。これらは文化財難民とユネスコで認定され、日本に流失した文物数十点も展示された。

そして、そのうちの何点かについては、返還にすでに同意を得たものであるという。

ケースを覗くと、ゼウス神像の左足とか仏陀頭部などはまだしも、バーミヤン石窟壁画断片やハッダ出土の仏陀右手部分とかは一点々々の展示というより、部分片々の収集と表現した方がいくらいである。

鉦脈から出土したラピス・ラズリーは、幸運の石として貴重とされているが、それは、戦争のない国でのことである。前1世紀の青銅銀鍍金の器などは個人蔵。殆どはフランスのギメ国立東洋美術館の所蔵が保管、あるいはベルリン国立インド美術館の所蔵とある。そして、この展覧会の図録の表紙にもなっている、アフガン東部ハッダ出土のストウツコ（漆喰）弥勒菩薩交脚像や菩薩頭部などは、フランスのアンドレ・マルローのコレクションである。

美術史家・好事家が収集して、欧米や日本の安全な所に保管していたから失わずに済んだ、とも言えるかもしれないが、そこに少しの矛盾も感じないのだろうか。まして、戦争の遠からず予想されるといふことで予め切り売りしたとなれば、それは破壊と何ら変わらないことになる。ただ、それを返却し、その遺跡の補修をその国の人に指導し支援することによってのみ、売人も収集家も、さらに言えば、

アフガンの内戦も米国の報復爆撃も止められなかったわれわれの救われる道もあるのではないだろうか。
アフガンの文化財が世界人類共通の遺産だというなら、アフガンの貧困も難民の問題も、その一国だけの問題にしてはならないのではないのか。

世界文化遺産の登録の要件に、文化の普遍性ということが強調されている。正しい戦争というのではないのである。「非戦」こそが、文化の普遍性として、文化財赤十字構想の命題としてあげられなければならない。



龍門石窟にて

なにかうそでなにがほんとの寒さかな 久保田万太郎

(二〇月稿・執事長)

植村和堂先生を偲んで

破石 澄元

植村和堂先生は、七十余年の永きにわたり、書道の研究及び実践を積み重ねられ、繊細な独自の書風を確立せられ、またその研究成果は多くの著書の中に集大成されました。先生は毎朝お食事前に、白衣観音を描き続けてこられたようですが、去る七月十八日、その観音様の御縁日に浄土に旅立たれました。近年御縁があつて、中尊寺でもいろいろな先生にお世話になりましたが、その思い出の一端を綴つて謝意を表します。

平成六年十一月十七日、NHK教育テレビの「写経講座」収録のために、植村和堂先生が佐藤芙蓉先生と御来山されました。私は、和堂先生のコレクションの中から中尊寺経（紺紙金銀字交書経）を拝見したい旨、あらかじめNHKのディレクターを通じてお願いしておりましたところ、「方便心論」一巻をお持ちいただきました。早速先生のご

了解を得て、別室で一紙ごとにとくとく拝見させていただきました。写真に納めさせていただきました。凡人の考えて、高名な先生はどこか気むずかしいところがあるのではと構えておりましたが、初対面でのお願いごとを、次々と心やすくご了解をいただいで、肩の力が抜ける思いでした。



在りし日の植村和堂先生

しばらく古写経についてご紹介させていただいて、金色堂に参拝することになりました。本堂から金色堂までは二百五十メートルほどの道のりですが、参道わきの紅葉はすでに散おちって折悪しく

初冬の冷雨が糸を引くように降っていました。「寒くないですか」とお伺いしましたところ「これくらいは大丈夫で

すね」と答えられ、静かに歩かれました。雨の糸筋を乱さない美しい後ろ姿に見えました。

金色堂に入ると私は説明を始めました。「金色堂は天治元年奥州藤原氏初代清衡公によって建立され……」お客様が来られたときにいつもするように話していましたところ、先生はあまり私の説明に興味を示されませんでした。先生は堂内を凝視していました。普通ここでは、仏像を見るとか、巻柱や須弥壇、あるいは建築そのものを見るのですが、先生の目はそのどれでもなかったように感じました。中尊寺経について、紺紙金銀字、紺紙金字という形で、歴大な写経作善を打ち続けた、奥州藤原父子三代の人物像に思いを巡らせていたのかもしれない。ちょうど他の参拝客もなく、しばらくそのまま時間が流れていきました。翌日は好天に恵まりました。先生の写経、そして中尊寺経についての話には私も加わらせていただいて収録は無事に終わったのでした。

和堂先生には、普段の会話の中では気遣いをみせられ、多少の洒落を交えながら、にこやかに応対していただきました。もちろん古筆の話になると、力強くご教示ください

たことは申すまでもありません。以来、私は厚かましくもお願い事を繰り返させていただきました。

平成九年十一月十日には、金色堂に眠る奥州藤原氏父子三代追善供養に、紺紙金字法華経一部十巻の奉納をいただきました。この金字経奉納をお願いに参りましたときも、先生は、「八巻でよろしいのですか。開結ともに十巻にしましょうか」とか「表紙・見返しは、どのようにしましょうか」と優しくたずねられました。私は「十巻でお願いします。表紙は中尊寺経に倣って宝相華唐草文様、見返しは靈山釈迦說法図に、できれば金色堂をあしらって頂きたい」とお願いしました。先生は「ハイそうしましょう」と御返事はいとも簡単でした。その後しばらくして、先生の書齋に立ち寄らせて頂きましたときに、「できてますよ」と言われて拝見した金字経に私は驚愕しました。その光・輝きは、体内に高圧の電流が流れたような衝撃でした。中尊寺経の輝きもこれなんだとあらためて理解した次第です。

平成十二年秋には、宝物館「新讚衡蔵」開館記念として装飾経の特別展「信の美」を開催いたしました。その際にも貴重なご助言を賜り、また資料の出版をいただき大成



平成の金字経「観普賢經」（見返絵及び巻首）

功を納めることができました。

本年五月でしたか、先生が体調を崩され、入院していると聞きました。千駄木の杜に先生を見舞いましたとき、「おーお」と僅かに声を発せられました。それはご自宅の二階から玄関にいる私にこやかに声をかけるときと同じでした。しかし体の不調は隠すべくもなく、その声はささ

がに弱々しく聞こえました。そして私は、先生は自らの老いに抗う人ではないなと淋しく思いました。

本年六月九日、中尊寺本堂で法華経一日頓写経会が行われました。その席で和堂先生からかの「方便心論」一巻が奉納されました。

先生にお世話になったこと、とても書き尽くせるものではありませんが、私にとって最も大きなことはお目にかかれたことです。そして先生の生き様の一端を垣間見ることができたということであります。文字通り温厚篤実。肩肘を張らず、静かに周囲に溶け込んでいる。自ら主張せず、しかし先生の周りにはいつも清冽な空気が漂っていたのでした。言葉に尽くせないお人柄に接することができたという喜びは私自身計り知ることができないほどに大きなものでした。

和堂先生から頂戴した御厚情に深く感謝申し上げ、心から御冥福をお祈り申し上げます。

（中尊寺仏教文化研究所主査）

なぜ、中尊寺の山号は「関山」か

——中尊寺成立の前史を探る——

菅野 成寛

はじめに

寺報のタイトル『関山』が中尊寺の山号にちなむことは、いまさら説明するまでもあるまい。そもそも山号さんごうとは、中国仏教において山中に寺院が建ち、その所在地を示す意味で山名をつけたことに始まるという（たとえば、天台山国清寺など）。日本仏教の場合、平地に寺院が営まれた奈良仏教の時代には山号がつけられることはなく、やがて平安仏教の時代にいたり、山岳に寺院が建てられたことにより山号が用いられ始め（比叡山延暦寺など）、後には平地の寺院にも山号がつけられるようになったという（東京・浅草の金龍山浅草寺など）。

一一二六年（天治3・大治1）、初代藤原清衡公によって創建された中尊寺が当初より「関山」を山号としたことは一

一八九年（文治5）の『吾妻鏡』あづまがたみの記事から明らかである。山号「関山」は、中国仏教そして日本の平安仏教の伝統を受け継ぐ由緒ある名称だったのである。

そこで、山名の関山にちなんで関山中尊寺が建てられたのであれば、中尊寺が成立する以前、既に関山は存在していたことになる。では、山名そして山号の「関山」とは、果たして何に由来した名称なのであろうか。たとえば、「比叡山」の場合、七一五年（和銅8）の漢詩文のなかに「裨叡ひたいは寔まことに神山」と記され（『懐風藻』）、神の信仰と関係する山名であったことが窺える。

中尊寺の「関山」が「衣関」に由来した山号であることは古くから言われ続けてきた中尊寺伝承の一つである。その真偽を一つひとつの歴史史料から検討していけば、中尊寺成立の前史も自ずと明らかになるだろう。

一、十和田a火山灰の発見

中尊寺が一一二六年に成立したことは『中尊寺供養願文』から明らかだが、では関山そのものの歴史はどこまで遡るであろうか。それを最も雄弁に語るのが近年の境内発掘調

査の成果である。

一九七六年（昭和51）、岩手県教育委員会によるあかどう関伽堂跡（金色堂前）調査に際して、多量の火山灰を堆積させた大溝（上幅約4m・下幅約1.6m・深さ約1.6m）が発見され、一九九七年より九八年（平成9～10）にかけて平泉町文化財センターが行なった金色院跡（現在の護国寺の直下）の発掘調査においても大掛かりな堀（上幅約3.5m・下幅0.5m・深さ約2m）が見い出され（写真）、そのなかには同様の火山灰が混じり込んでいたという。中尊寺を含む平泉遺跡群から出土した火山灰の分析結果を参考にすれば、その火山灰はおそらく十和田a火山灰で、九一五年（延喜15）、十和田山が噴火した際に周囲に降り積もったものであろう。

つまり、関伽堂跡の大溝は九世紀末から十世紀初めにかけて、そして金色院跡の堀は十世紀初め以降の十一世紀頃に掘られたものと判断される。以上から、関山の歴史が中尊寺成立を二百年以上も遡ることが明らかとなった。

二、関路と関山

では、その関山に何があったか。実は僅かなヒントが



金色院跡の堀

『吾妻鏡』のなかにある。鎌倉幕府の歴史記録である『吾妻鏡』は中尊寺と平泉研究の第一級史料としても有名なが、その一一八九年（文治5）九月十七日記事の中尊寺部分に次の様に見える。

関山中尊寺の事。（中略）清衡これを草創す。（中略）寺院の中央に多宝寺あり。（中略）その中央に関路を開き、旅人往還の道となす。（下略）

この記事によれば、「関山」を縦貫して「関路」が存在

したことになるが、中尊寺成立の十二世紀当時、付近に「関」が存在した事実には伝わらない。そこで、十二世紀以前の平泉地域の地理がおよそ概観できる『陸奥話記』をのぞくと、一〇六二年（康平5）の記事のなかに「関道」と「関下道」が見え、立地上それが『吾妻鏡』の「関路」と一致することが判明する。関山を縦貫する関路（道）は、十一世紀半ばには既に存在していたのである。

次に、山号の「関山」を調べると、これを「関山」と訓むケースが数多く見い出せる。七九五年（延暦14）に一時廃止され、後に復活した近江国（滋賀県）の逢坂関について、『蜻蛉日記』九五六年（康保2）九月の記事に逢坂関の「関山」と見え、そのほか『源氏物語』や『更級日記』にも逢坂関の関山が登場する。また、『更級日記』の作者である菅原孝標女は、一〇二〇年（寛仁4）秋、駿河国（静岡県）の横走関の関山にとどまり、一二四二年（仁治3）八月、『東関紀行』の作者は美濃国（岐阜県）の不破関の関山について書き記している。

つまり、「関山」とは古代の関とかかわる名称、山名だったのであり、以上の「関路」と「関山」の事例から、中

尊寺成立の以前、この地に「関」が存在したことは間違いない。

三、衣河関と衣関

右のように、山号の「関山」が古代的な関と結びつく名称であることを前提としてさらに調べていくと、先ほどの『陸奥話記』には、関山の直下を流れる衣川の付近に安倍氏の「衣河関」が存在した、と記す。これは他の史料からも確認できるため、衣河関は確かに十一世紀には実在したことになる。では、関とは安倍氏の衣河関のことであり、衣関は単なる中尊寺伝承にすぎないのであろうか。衣関と衣河関とは僅かに一字違いであり、まことによく似ている。伝承の衣関とは、実は安倍氏とかかわる衣河関の誤りではあるまいか。

ところが、『吾妻鏡』にはきわめて注目すべき記述がある。一一八九年九月二十七日記事は、平泉を侵略した源頼朝が安倍氏の衣川の遺跡を見学した内容のものだが、そのなかに、「西は白河関を界し、十余日の行程なり。東は外浜に抛るか、また十余日。その中央に当たりて、遙かに関

門を開き、名づけて衣関という」と「衣関」が登場する。従来、この部分は、安倍氏の「衣河関」の単なる誤記と見なされてきたが、実はこの記事が、先に記した『吾妻鏡』の中尊寺の部分の「白河関より、外浜に至るまで二十余ヶ日の行程なり。(中略)その中間に関路を開き」と見事なまでにオーバーラップし、その文意までも同じくする点は無視できない。

というのは、鎌倉時代に『吾妻鏡』を編集する過程で、記事の入れ違いが多くあることが従来から指摘されてきたからである。そうであれば、この九月二十七日の記事も、本来は十七日の中尊寺部分にはいるべきものが歴史上著名な安倍氏の衣河関にひきよせられ、衣関と衣河関とが混同され、誤って二十七日の記事にまぎれ込んでしまったのではないか。その『吾妻鏡』には多くの写本があるが、右の部分はすべて「衣関」で一致しており、衣河関と記す写本は一つとしてない。そう見なして始めて中尊寺部分における「関山」と「関路」の説明がつかし、その逆にこの部分を二十七日記事に入れた場合、まったく意味が通じないのである。

そこで衣関がいよいよ問題となる。

四、衣関は実在したか

「衣関」が最初に登場する史料は、九五三〜八年(天曆7〜天徳2)頃に成立した『後撰和歌集』である(直地とまたのまさら兩身に近き衣の関もありといふなり)卷16・雑2)。このほか、九九五年(長徳1)に陸奥守として奥州へやって来た藤原実方(かた)の和歌や、一〇〇四年(長保6)陸奥守となった橘道貞への和泉式部の送別歌にも「陸奥の衣の関」と見えるなど(『藤原実方集』・『詞花和歌集』)、衣の関は陸奥国の有名な歌枕であった。歌枕とは和歌に詠まれた名所であるが、そのほか右の『後撰和歌集』には逢坂関や不破関、あるいは足柄関など実在した古代関が歌枕として詠み込まれており、このことは歌枕「衣の関」の実在性をひとまず暗示することにつながる。

次の史料は、三章で述べた一一八九年(文治5)の『吾妻鏡』の「衣関」で、中尊寺の山号「関山」はこの衣関にちなむのでは、と理解したものである。

実は、右の〈衣関↓関山〉の想定を裏付ける有力な史料

が中世の中尊寺文書のなかにあった。一三三四年（建武1）八月の中尊寺衆徒等申状案には、ハッキリと「衣関山月見坂」と明記されており（衣河関山ではない）、これが衣関と関山とを一体化させた語であることは自明であろう。衣関山とは明らかに衣関に由来した名称だったのであり、衣関が存在しない中世の時代、このような山名が突如として誕生するはずがない。

すなわち、史料の性格と成立年代がまったく異なり、しかも相互に何の影響関係もない『後撰和歌集』と『吾妻鏡』と中尊寺文書のそれぞれに共通して、「衣の関」や「衣関」あるいは「衣関山」という語が登場したことは決して偶然の一致ではあるまい。衣関が実在したからこそ歌枕の衣の関や衣関山という名称も生まれることができたのであり、それが中尊寺の山号「関山」となったこと、もはや説明を要すまい。

さて、衣関が初めて見える史料が十世紀半ばの『後撰和歌集』であれば、おそらく衣関の成立は十世紀初頭の頃。十一世紀に存在した安倍氏の衣河関に先立って確かに衣関も実在したことになり、その成立推定年代は一章で述べた

中尊寺関伽堂跡の大溝の開削年代とも合致してくる。

では、衣関はどこに所在したか。

五、衣関はどこか

これまでの検討から、山号の「関山」が衣関に由来し、その関山の地に衣関が実在したことはもはや動かし難い事実となった。ところが、十一世紀当時の平泉の地理を記した『陸奥話記』に衣関の姿は見い出せない。おそらくこれは、十一世紀当時における衣関の消滅を思わせ（この時代、既に安倍氏の衣河関が存在していた、その所在地を探る手段は断たれたかに見える）。

だが、手掛かりをまったく欠いたわけではない。唯一の古代関の発掘調査例である美濃国の不破関のケースに着目したい。古代関東との交通を検察する目的で八世紀初頭の頃に設置された不破関は、北側を伊吹山地、南側に鈴鹿山脈と養老山脈が南北に連なる直下、関ヶ原の凹地に関跡が所在したことが一九七四～七年（昭和49～52）間の調査で確認されている。

この立地は、『東関紀行』の一二四二年（仁治3）部分に

記された、「柏原と云所立て、美濃国・関山にもかかりぬ。

(中略)越え果てぬれば不破の関屋なり」とも合致し、古代・中世における不破関は伊吹・鈴鹿・養老山系の山麓、しかも関山を越えた地点に存在したことが判明する。

同様に、駿河国の横走関の場合も、足柄峠の山麓、関山の麓であることが『更級日記』の一〇二〇年(寛仁↓)秋の記述から復元でき、また近江国の逢坂関についても逢坂峠の麓、大津寄りの地が想定されるにいたっている。

すなわち、関山とは古代関の背後に存在した山容の名称だったのであり、であれば、衣関と関山の場合も、関山の山麓に衣関が設置されたに違いないことになる。驚くことにこの推定は、近世の地誌に記された衣関の伝承地とも見事に一致する。たとえば、仙台藩の医師、相原友直が一七七三年(安永↑)に記した『平泉雜記』には、「関山ノ号ハ、山下ニ衣関アルニ依テ名付タルコト分明ナリ」、と明記。他の地誌においても一致して関山の山麓、平泉側の平地を衣関と伝承しており、近世に書きとめられた衣関伝承の精度にはこのほか高いものが認められるのである。

こうした史料的な事実と伝承との見事なまでの合致から

すれば、関山丘陵の中尊寺月見坂下の地に衣関が所在したことはほぼ疑いない。しかも、二章で述べたように、関山上には関路が縦走していたのであるから、十世紀初め頃に掘られた関伽堂跡の大溝は年代的に衣関、そして十一世紀頃と推定される金色院跡(現在の讃衡蔵の直下)の堀は安倍氏の衣河関と関係する遺構と見なすのが自然であろう。

中尊寺境内には、その前史を語る実に驚くべき遺構が眠っていたことになる。

六、なぜ衣関は成立したか

最後に問題となるのは、この時期この場所に、なぜ衣関が成立したか、である。

衣関が成立した十世紀初めの時代、陸奥国の政治支配の体制は、まさに転換期にさしかかっていた。この時代まで、南北にきわめて長大な陸奥国を国府の多賀城が一括的に支配する体制であったが(多賀城には陸奥守がいた、ちようどここの時期、陸奥国を南部と北部の2ブロックに分け、磐井郡から南部地域は多賀城が、そして胆沢郡から北部の地域は胆沢城が(胆沢城には鎮守府將軍がいた)直接的に支配する、一

国2ブロック体制が実施されることとなったのである。胆沢城を中心としたこの北部地域に誕生したのが、いわゆる「奥六郡」ブロックであり、胆沢郡・江刺郡・和賀郡・稗貫郡・志波郡・岩手郡の6郡によって構成されていた。陸奥国の主要な産物といえば砂金や馬がすぐに思いつくが、その原産地こそ奥六郡とその奥部地域。この奥地には蝦夷が居住し、九世紀から十世紀にかけて、蝦夷の金や馬などを求めて中央と国府の官人や権力者の手先などが不法に乱入、幾度となく中央政府からの禁止令が出されていた。

すなわち、十世紀初めに開始された奥六郡体制とは、その奥地の蝦夷支配と陸奥国の産物（砂金や駿馬など）の安定的な確保を目的として始まったもので、衣関の設置は、ちょうどこの奥六郡システムの始動期にあっていた。しかも、設置された場所は、磐井郡（多賀城の支配ブロック）と胆沢郡（胆沢城の支配ブロック）の接点、両郡の境界にあたる関山の麓。古代国家の法律の解説書によれば、「関」は境界上に設置すべき規定があった（『令集解』）。であれば、衣関が磐井・胆沢両郡の郡境上に設定されたのは、この規定を踏まえてのものだったことが判る。

つまり、衣関は、十世紀初頭に陸奥国2ブロック体制として動き出した奥六郡システムと連動して成立したもので、衣関の立地が南部の磐井郡側の平泉であることは、南から乱入する中央や国府の不法者に対する検察機関として設置されたことを語っている。

実はこの問題とからんで、奥六郡最北の岩手郡にも「岩手関」が成立したらしい。九六一年（応和1）から九九四年（正暦5）頃の如覚法師（藤原高光）の歌に、「いはてのせき」（岩手）（関）が陸奥の歌枕として登場する（『夫木和歌抄』第21・雑3）。「いはてのせき」が歌枕となったのは、実在の衣関が歌枕の「衣の関」となったのと同様の経緯があったのではないか。というのも、岩手郡の存在なくしては「いはてのせき」の歌枕化はあり得ないはずで、しかもその岩手郡は、奥部の蝦夷の地とも郡境を接していた。右に述べた通り、奥六郡システムが奥地の蝦夷支配ともかわる体制であれば、奥地との郡境上に岩手関を設定することは当然の処置であったと考えられる。年代も衣関と同様の十世紀。奥六郡の南境に衣関を、そして北境には岩手関を設定することは奥六郡支配の体制としても一貫している。「いはてのせき」

が歌枕となった背景に、衣関と同様の「岩手関」の实在を想定することができるのである。

かくして、衣関（そして岩手関）の設置は奥六郡体制と一体のもので、その成立には、北方の政治社会的情勢がするどく反映していたことが判明する結果となったのである。

おわりに

これまで述べてきた点を整理しておこう。

中尊寺の山号「関山」は、「衣関」に由来すること。その衣関の成立は十世紀初めのことで、当時スタートした奥六郡体制の一環として設置されたこと。衣関の立地は、中尊寺山麓の平泉側であること。次の十一世紀には安倍氏の「衣河関」が存在したこと。この十一世紀の安倍氏の時代には衣関が、そして十二世紀の藤原氏の時代には衣河関が存在せず（これは、衣関が安倍氏以前、衣河関は藤原氏以前に消滅したことを窺わせる）、その関路のみが関山上を縦走していたこと。中尊寺の境内には、右の衣関と衣河関にかかわると思われる大溝と堀の遺構が存在すること、以上である。

では、関山の歴史的性格は、当初から衣関のような政治

性の強いものであったろうか。

というのも、逢坂関が成立する以前の逢坂山を『万葉集』は「手向け山」と記し、また足柄関が設けられる以前の足柄山についても同様の意識が確認できるからである。「手向け山」とは、旅人が道中の安全を祈るため幣ぬさを手向けた山、すなわち〈霊山〉を意味するが、衣関成立以前の関山がこのような霊山であった可能性は十分にある。

右の大溝と堀をも含めた今後の境内の発掘調査に期待するところ大なのであり、僅か「関山」の二文字にひそむ歴史的世界はかくのごとく広い。

（中尊寺仏教文化研究所主査）

〔グラビア解説〕

植村和堂氏御奉納の金銀字経

紺紙金銀字交書一切経（以下金銀字経と略記する）は、

奥州藤原氏の初代藤原清衡が発願し書写させたもので、紺紙に金字と銀字で経文を一行ごと交互に書いている。経奥書によると、一切経書写事業は永久五年（一一一七）から始まり、大治元年（一一二六）の中尊寺大伽藍一區の建立供養の「願文」は、「金銀泥一切経一部、金書と銀字一行を挟んで光を交わし紺紙玉軸、衆宝を合して巻を成す」と述べている。

書写が行われた会所は「於奥州江刺郡益沢院内書之畢」と奥書に記したものがあり、現在の江刺市内であったことがわかる。

一切経であるから、当初は五三〇〇巻ほどにも及ぶものであったとみられる。惜しいことに、豊臣秀吉の時代に中尊寺からそのほとんどが持ち出されてしまった。現在は大長寿院所蔵の十五巻が国宝の指定を受けている。また、昭

和五十六年（一九八一）から昨年に至る二十一年間に九巻が中尊寺に還蔵されている。

中尊寺では本年六月九日、法華経一日頓写経会の日に東京都に在住の清和書道会会長植村和堂氏から金銀字経一巻を奉納いただいた。

植村氏には平成九年の金色堂国宝指定百年記念祭に際しての「平成の金字法華経」作成、そして恒例となった一日頓写経会の際に一方ならぬご尽力をいただいている。御縁の深い方からの、しかも国宝級の金銀字経を御奉納いただき、一山大衆の感激も一入であった。

金銀字経を御奉納いただいた翌月、七月十八日に植村和堂氏は御逝去された。昨夏までのお元氣だったお姿が脳裏にうかんだ。清衡公祥月命日の翌日に亡くなられた。

謹んで御冥福を祈るばかりである。

□ 金銀字経 紹介

昨年のお寺報「関山第八号」に「近年還蔵された金字経・

金銀字経について」を掲載したが、これに倣^{なら}ってデータを左記のように掲げることにした。尚、見返絵及び巻首部分のカラー写真については「寺報ぐらびあ」の頁に掲げ参考に供することとした。

經典名 方便心論^{ほうべんしんろん}

尾題 方便心論經一卷

見返絵 樹下說法図

(二脇侍・二天か・五僧形・天蓋・散華)

入藏年月 平成十四年六月

文字色 金銀交書

本紙縦 二五・四〇

全長 八七八・〇〇

見返横 二二・一〇

紙数 一七

界高 一八・六〇

界幅 一・八〇

大藏経No. 一六三二

注1
經典名は、便宜、大正新修大藏経の経題とした。
注2

「中尊寺金銀字経に関する研究」報告書(研究代表者・京都国立博物館長藤澤令夫)に準じ、本紙縦・全長・見返横・界高・界幅の単位はセンチメートルとし、見返絵の「比丘」は光背のある比丘形、「僧形」は光背のない比丘形とした。紙数は見返絵を除く本文(制作当初分)のみの紙数を示す。

注3
大藏経No.の数字は大正新修大藏経の番号である。

(中尊寺仏教文化研究所主査 北嶺澄照)



紺紙金銀字交書経「方便心論」(部分)

研究／出版

平成14年2月～平成14年11月

〔出版〕

『平泉の世界』奥羽史研究叢書3 入間田宣夫・本澤慎輔編

高志書院

(執筆者は次の通り)

「前九年合戦と後三年合戦」

樋口知志

「列島ネットワークの中の平泉」

野口実

「藤原清衡の妻たち」

川島茂裕

「奥六郡安倍氏から奥州藤原氏へ」

八木光則

「平泉藤原氏の支配領域」

八重樫忠郎

「環壕集落とは何か」

工藤清泰

「平泉の道路と都市構造の変遷」

羽柴直人

「平泉の宗教と文化」

菅野成寛

『北の平泉、南の琉球』日本の中世5 入間田宣夫・豊見山和行著

中央公論新社

『中世都市鎌倉と死の世界』 共著

高志書院

「平泉の葬送」

八重樫忠郎

週刊・日本の街道『奥州道中3』平泉から盛岡へ

講談社



『白い国の詩』

東北電力(株)

(本年一月号～十二月号まで、特集「平泉と東北の中世」と題して次の通り連載)

「平泉文化と東北文化」

東北学院大学教授 大石直正

「平泉の仏教美術」

弘前大学教授 須藤弘敏

「発掘された平泉藤原氏の館」

岩手県立博物館 三浦謙一

「かわらけは語るー平泉の宴」

筑波大学大学院 松本建速

「復元された毛越寺庭園」

平泉町文化財センター所長 本澤慎輔

「金色堂と平泉の仏教文化」

中尊寺仏教文化研究所主査 菅野成寛

「陶磁器が語ること」

平泉町世界遺産推進室室長補佐 八重樫忠郎

「平泉藤原氏五代の人物像」

東北大学東北アジア研究センター教授 入間田宣夫

「都市平泉の構造」

奈良女子大学大学院 前川佳代

「平泉の参詣曼荼羅」

前仙台市博物館館長 濱田直嗣

「発掘された村の印」

国立歴史民俗博物館副館長 平川 南

「平泉文化の広がり」

岩手大学教授 菅野文夫



〔論文〕

「平泉・金鶏山考」『磐井地方の歴史』岩手県南史談会

八重樫忠郎

「鎌倉時代の平泉の様相」『紀要』

財団法人岩手県埋蔵文化財センター

羽柴直人

〔報告書〕

『平泉遺跡群発掘調査略報』（中尊寺跡第61次Ⅱ期・63・64次）

平泉町文化財調査報告書第七八集

平泉町教育委員会

『柳之御所遺跡第55次調査概報』岩手県文化財調査報告書第一一三集

岩手県教育委員会

〔再録〕

「史都平泉を検索する」『東方に在り』第六号

藤島亥治郎

〔書評〕

「〈書評〉大石直正著『奥州平泉の時代』『歴史』第九九輯

菅野成寛



風信 / 語録 岩手・中尊寺貫首らが酒田訪問 家臣の「36人衆」と交流

(山形新聞・11月18日)

藤原氏が結ぶ

時空超えた縁

奥州平泉の藤原氏滅亡後、三十
六人の家臣とともに酒田に逃れ、
後に尼僧となったとされる「徳の
前」にゆかりの深い泉流寺（酒田
市中央西町）を十七日、中尊寺の

千田孝信貫首をはじめとする岩手
県平泉町の関係者が訪ね、家臣の
子孫とされる市民らと交流した。

徳の前は、藤原秀衡の妻とも、
妹ともいわれ、逃れ着いた酒田で
仏の道に入り、後に徳尼公と称さ
れるようになる。起居した泉流庵
が泉流寺の起源とされ、寺の境内
には徳尼公廟が建立されている。
家臣の子孫は、後に「酒田三十六
人衆」と呼ばれ、全国屈指の優れ
た住民自治を酒田に根付かせた。

今回、酒田に来訪したのは、千
田貫首をはじめ平泉町観光協会の
関係者ら十四人。泉流寺のほか、
かつての三十六人衆の筆頭格であ
った回船問屋の旧鑑屋などを訪ね
た。

泉流寺では、現在の酒田三十六
人衆（鑑谷誠一代表）の会員らと
懇談。鑑谷さんは「われわれは徳
尼公を、酒田を開いた方として尊
敬している。確証はないが、藤原
氏の末えいであるという意識と誇
りを常に持っている」と述べ、酒
田における徳尼公の伝説や家臣の
子孫である三十六人衆の功績など
を紹介した。
千田貫首は「宿願が実現し感慨
無量。伝承のご縁を八百年以上も
大切にしてくれている皆さんの努

力に敬意を表したい」とあいさつ。
全員で徳尼公廟を参拝した。同行
した佐々木邦世中尊寺執事長は
「徳の前が、酒田でこのように大
切にされていることを平泉の人々
に紹介し、双方の交流のきっかけ
にしたい」と話していた。

———

平成十四年四月現在における酒
田三十六人衆の方々は次の通りで
ある。鑑谷誠一、池田雅弘、尾関
恒夫、粕谷精一、上林英樹、上林
康子、小林喜郎、後藤捷雄、三丁
目正一、須藤秀三郎、田桑良子、
田中英夫、永田裕子、西野 米、
根上弘喜、根上 勇、二木栄一、
本間重男、森 悦子（以上敬称略）

(河北新報・けやき並木 より)

秘仏と御開帳

秘仏というのは普段は滅多に直接礼拝することができず、昔は三十三年に一回、御開帳という行事の時にのみ礼拝することができた。これは恐らく、密教の風習であつたと思われ、その影響で、瑞巖寺の有名な五大堂の五大明王も永らくその伝統を守ってきた。

しかし、私が十年前に任職してから秘仏の傷み方が気になり、秘仏の信仰と保存の在り方に頭を悩ませたが、東北大学大学院の有賀祥隆教授（東洋・日本美術史）と相談した結果、ついに大修理をすることに決心をした。その結果、この五大明王は国の重要文化財に指定されて公開の義務を背負われ、三十三年に一度の御開帳とい

う信仰形態に終止符を打つことになる。しかし、それ以来、私は博物館をはじめ多くの人々が仏像を単なる美術品としてのみ鑑賞している現状が大変気になり出した。

いつであつたか、法隆寺のかつて秘仏であつた百済観音像が修理を終え、海外での公開展後、帰朝公開展が東京上野の国立博物館や仙台市博物館で開催されたことがある。早速、上野へ拝観に行った時、その拝観者の多さに驚き、しかし、合掌さえしている人が皆無であることに嘆き悲しみながら帰ってきたのであつた。

仙台市博物館ではさすがに人は少なく、私はゆっくり落ち着いて合掌参拝することができ、しばらく椅子に座りながら、その優美な

お姿を拝観したのであつた。しかし、その静かな環境にもかかわらず、人々は仏像をただ美術品として鑑賞するだけで、合掌礼拝する人が皆無であることは上野と全く同じであつた。

だが、いつころであつたか、中尊寺さんが秘仏である「一字金輪仏頂尊」を十年ぶりに御開帳した時、早速参拝に参上したが、その厳肅さに感激したことがある。拝観者の人数を時間的に区切って入場させ、一同に合掌礼拝させた後、皆静かに拝観をしていたのである。

(瑞巖寺住職)

▽なお、瑞巖寺平野宗浄師には本年七月六日御遷化された。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

〔関山句囊〕

〈第四十一回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

梅雨明けは明日かも知れず光堂 (岩手県知事賞)

今井千鶴子選 特選 盛岡市 佐藤義行

杉落葉降るより掃かれ中尊寺 (中尊寺賞首賞)

特選 一関市 きうちたかし

万緑の山従へて大河あり (みちのく賞)

特選 一関市 千葉秀樹

光堂前の落梅ひろいつつ

秀逸 名取市 後藤輝子

法灯をともして梅雨の光堂

秀逸 一関市 佐藤冬扇

落し文一卷願文かも知れず

原田青児選 特選 盛岡市 柴田綾子

古都の夏ガラスの中の光堂

特選 一関市 千葉恵泉

金色堂ぬけて濁世へ夏の蝶

小原啄葉選 特選 北上市 浅水 達

萍も浮かざるものも中尊寺

戸塚時不知選 特選 盛岡市 菊池節子

覆堂に消ゆる人影梅雨ふかし

菅原静風子選 特選 一関市 砂金青鳥子

梅と干す裏参道に僧ひとり

秀逸 一関市 鈴木きぬ絵

(兼題)

能果てて鬼女紛るるか春の闇

今井千鶴子選 特選 東京都 金子千洋子

ゆく春の光堂より稚児の列

原田青児選 特選 一関市 砂金青鳥子

春衝のうすくれなゐの蓮いらく

戸塚時不知選 特選 北上市 小原山嶺

春暁や闇の引きゆく光堂

秀逸 平泉町 旭 光

千年の火いろ給はり薪能

〔『みちのく』十一月 平泉町 齊藤その女〕

芭蕉像林の草鞋に残る虫

〔『みちのく』二月 平泉町 齊藤その女〕

晚菊の屋根に咲きたる中尊寺

〔『草笛』二月 佐藤泰子〕

鞘堂へ光堂へと道としへ

〔『みちのく』 前沢町 服部常子〕

一隅を照らす白菊中尊寺

金色堂色なき風の通りけり

〔『草笛』二月 八尾みつこ〕

*「道をしへ」は夏出てくるニセンチぐらいの、赤・黄・紫・黒・緑などの斑点のある甲虫。地上にいて人がくると飛びたつて、少し先へ降り、近づくとまた飛ぶさまが道を教えているよう。

青邨の旅人の句碑赤蜻蛉

〔『草笛』二月 村松正規〕

光堂裏の明るし濃紫陽花

〔『みちのく』九月 前沢町 服部常子〕

古実式笛のかすれや若葉雨

能を待つ杉の木の間の遠霞

〔『草笛』八月 佐藤曲水〕

梅雨さ最中なか灯のゆらめける光堂

〔『みちのく』九月 名取市 後藤輝子〕

能舞の笛の聞ゆる田を植ゑる

〔草笛〕八月 及川秀士

清衡が関山に日箭骨^ヤ正月

〔読売俳壇〕三月 北上市 長畑トキ

*骨正月は二十日正月のこと。

光堂かこむ木立の蝉時雨

〔読売俳壇〕七月 佐野市 市川 豊

泰衡の首洗井戸の蛇葎

〔志和陣ヶ岡峰神社〕

〔寒雷〕十月 岩手県 瀬川十女子

中尊寺杉千本の蝉時雨

〔読売俳壇〕九月 柏崎市 桑田明子

芭蕉と追ひ楸郎に蹤き奥の秋

月光の扉をひらく金色堂

〔河北俳壇〕十一月 仙台市 丹野重男

鈴虫の声澄み透り中尊寺

〔寒雷〕十二月 多田学友

*不思議な雰囲気の句である。名月の夜、金色堂がおの

ずと扉を開いたとも、月の光が金色堂の扉を押し開いたとも読める。竹取物語に通ずる幻想世界がある。

〔高野ムツオ 評〕

泰衡のかうべ蔵しぬ青鷹^{もろがへり}

〔青鷹〕 川代くにを

大文字あどくつきりと山眠る

〔読売俳壇〕二月 東京都 白木静子

*秋灯下、本坊机辺の俳誌や新聞俳壇などから、たまたま目に入ったものを拾ってみた(邦世)

「中尊寺の三種一切経」展（回顧）

北嶺 澄照

現在の宝物館讚衡藏^{さんしやうぞう}は、平成十二年三月二十四日に落慶式を執り行い開館したもので、旧讚衡藏と異なり企画展示室を設けている。この年は中尊寺開山千五十年祭が催行されており、平成十二年度は「寺宝綜鑑」、「信の美一写経のこころ」と二つの大規模な企画展が実施された。特に「信の美一写経のこころ」は全国の装飾経を一堂に集めて展観を行ったものであり、好評をいただいた。

昨年^{こぞ}は寺内部で新執行局が発足したことに伴って、文化財管理の仕事を私が引き継いだ。企画展示室では館蔵の「源義経東下り絵巻」を展示し、さらに「源義経東下り絵巻」の各場面から選ばれて作成されていたパネルを8枚展示し、平泉ゆかりの武将源義経を紹介した。

本年二月、寺の内部に讚衡藏運営委員会が設置され、「企画展示室を有効に利用するように」との方針が示され

た。それに基づき、四月二十七日から九月二十三日までは新たに入蔵した平山郁夫画伯の彩管になる「中尊寺一字金輪像」を入仏開眼し拝観いただくことにした。温湿度が比較的安定している秋には館蔵の優品を展示する館藏品展を開催することになった。

中尊寺は建武四年（一三三七）の火災で多くの堂塔・宝物を失っているわけだが、今なお金色堂をはじめ国宝・重要文化財を三千点以上伝えている。しかも、金工・漆工^{しゅうこう}・染織・書とセットになって遺^{のこ}っていることに大きな特色がある。

特に書の分野では、経蔵に三種（3セット）の一切経が伝えられてきた。寺伝によれば奥州藤原氏の初代清衡公は「紺紙金銀字交書一切経」、二代基衡公は「紺紙金字一切経」、三代秀衡公は「宋版一切経」をそれぞれ奉納されたという。金色堂とともに大切な寺宝として、中尊寺及びこの地域の先人たちによる必死の努力で守りぬかれてきたものである。

第一回館藏品展においては、この「中尊寺の三種一切経」をテーマとすることにした。現在の讚衡藏の展示内容をみ

てみると、書の分野は劣化しやすい紙を材質としていることから、劣化防止のためやむを得ず複製展示となっている。今回は期間を限り、展示品を入れ替えしながら、国宝指定品をはじめとし、未指定品、断簡・残欠を含め「先人たちの遺してくれた寺宝」を展観することにした。

実際の展示の前には、展示品のリストの作成、展示計画の作成、リーフレットの作成等々と戸惑うことが多かったが、幸い、讚衡藏運営委員会の委員をはじめ、各位から助言・指導をいただいで、九月二十四日から二カ月にわたる館蔵品展をスタートすることができた。また今回は写真パネル・キャプション・リーフレットの全てを外注せずに、デジタルカメラ・パソコン・カラープリンターを使って寺内部分で作成してみた。

最初の一週間ほどは、できるだけ展示室に足を運び、拝観者の反応を確かめることに努めた。拝観者動線については当初の予想とほとんど変わらず、スムーズにいった。ご参拝の方々のもらす生の感想や声を聞くことによつて、私自身学ばせていただいたことも少なくなかった。

今後の課題としては、準備期間を十分確保し、内容の充

実した展示を期したい。年間の展示計画をできるだけ早く示すとともに情報発信にも留意しなければならぬと感じた。報道機関への情報提供を欠いたのも大きな反省点。心して次回の館蔵品展に当たりたい。

尚、展示の記録として展示品リストと写真を掲げることにする。
(管財部執事)

第一回館蔵品展「中尊寺の三種一切経」主な展示品リスト

会期 平成十四年九月二十四日～十一月二十四日

紺紙金銀字交書一切経

仏説雜藏經(国宝)

入楞伽經卷第二(国宝)

優婆塞戒經卷第七(国宝)

過去莊嚴劫千仏名經卷上(昭和五十六年還蔵)

伽耶山頂經(平成七年還蔵)

大般若波羅蜜多經卷第七十(平成十三年還蔵)

大般若波羅蜜多經卷第三百七十八(平成十三年還蔵)

転法輪經憂波提舍一卷(平成十三年還蔵)

宋版一切経 唐櫃そうほんいっさいきょうからびつ

宋版一切経

大毘婆沙論卷第四百十だひばしゃろん (東禪等覺院版)
とうぜんとうかくいん

阿毘達磨集異門足論卷第八あびだましょくいもんそくろん (開元寺版)
かいげんじ

法苑珠林卷第五十一ほうおんじゆりん (思溪版)
しけい

紺紙金字一切経

大般若波羅蜜多經卷第九 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第十三 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第四十二 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第五十八 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第六十三 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第八十六 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第一百三十三 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第一百五十三 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第一百六十六 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第二百二十四 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第二百二十七 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第三百三十九 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第五百五十九 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第六十七 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第六十九 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第七十二 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第八十八 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第二百一 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第二百八 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第三百八十八 (国宝)

大般若波羅蜜多經卷第三百殘欠

大般若波羅蜜多經卷第四百七十二斷簡

※展示品リストの構成は陳列順ではない。

※会期中に陳列替えを行ったため、リスト掲載の作品が全て同時に展示されていたわけではない。



昭和20年代後半の経蔵内部のようす
 経蔵の中で三種一切経はこのように収蔵されていた。現在は保存のため、全てが宝物館
 讃衡蔵へ移されている。



経蔵内部に掲げられている扁額

昭和30年（1955）まで「三種一切経」は経蔵に納められていた。

先人たちは奥州藤原氏三代が奉納した三種一切経（寺古来の表現）を誇りとし、この扁額を掲げ、その護持に努めてきた。

紺紙金銀字交書一切經

優婆塞戒經 卷第七 (国宝)

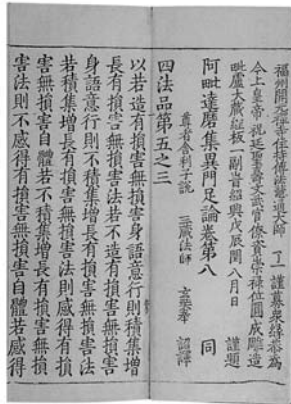
清衡公が奉納されたもので、大長寿院所蔵の15巻が国宝に指定されている。尚、昭和56年から現在までに10巻が還蔵され、中尊寺所蔵となっている。



宋版一切經

阿毘達磨集異門足論卷第八

寺伝では秀衡公の奉納というが、実際奉納されたのが基衡公の時代か秀衡公の時代なのか定かではない。紺紙金字一切經書写のテキストとなったものである。



紺紙金字一切經

大般若波羅蜜多經

卷第六十三 (国宝)

寺伝では基衡公奉納というが、三代秀衡公の奉納であろうと思われる。大長寿院所蔵の2,724巻が国宝に指定されている。



〔陸奥教区宗務所報〕 第二部 中尊寺関係

□平成十四年

三月一日、二日

法儀音律研修会 於延暦寺

観音院 清水広元参加

三月二十六日

布教養成所研修会 於毛越寺

司会 蓮乗院法嗣 村田祖澄師

助言 中尊寺貫首 千田孝信師

山内より八名参加

四月三日

御修法鎮将夜叉法參勤 於延暦寺

中尊寺 千田孝信

七月六日

一隅を照らす運動青森福祉大会

於青森県中里町

講演 「二本の手」

講師 中尊寺貫首 千田孝信師

山内より九名参加

福聚教会中尊寺支部二十一名参加

中尊寺檀信徒三十八名参加

九月十六日

陸奥教区法要

於仙台市光圓寺

山内より六名参加

十月十二日

天台宗一斉托鉢

於平泉町

山内より貫首はじめ十六名参加

集まった浄財は平泉町社会福祉協議会に寄

託された

□ 役職任免

一隅を照らす運動総本部

(平成十四年六月二十一日)

副会長委嘱

中尊寺

千田孝信

□ 住職任命・解任

任命 (平成十四年一月六日)

仙岳院代表役員代務者

陸奥教区宗務所長

(同年一月九日)

菅原光中

天台寺副住職 真珠院

(同年三月十二日)

菅野澄順

仙岳院別院萩恩院代表役員代務者

陸奥教区宗務所長

(同年四月一日)

菅原光中

現光院兼務住職 中尊寺

(同年十月一日)

千田孝信

大徳院住職

(同年十月十六日)

佐々木慎宥

長楽寺兼務住職 大徳院

解任 (平成十四年八月十五日)

佐々木慎宥

大徳院住職

(平成十四年九月三十日)

佐々木賢宥

長楽寺住職

佐々木慎宥

□ 教師補任 (平成十四年四月二十一日)

少僧都

観音院

清水広元

僧都

長楽寺

佐々木慎宥

権大僧都

法泉院

三浦春興

僧正

願成就院

三浦高信

(同年五月十五日)

大僧都

瑠璃光院

菅野康純

(同年六月十九日)

権大僧都

利生院法嗣

菅野宏紹

権大僧都

常住院法嗣

佐々木長生

□ 敬弔

(平成十四年八月十五日)

大徳院住職

権大僧正

佐々木賢宥

七十八才

☆ 東山町台風六号被害復旧支援募金

七十万六千四百九十七円

中尊寺

東山町へ寄託した

御神事能番組

五月四日

法樂
古美式三番

開口 清水広元
祝詞 佐々木秀厚
若女 菅野宏紹
老女 菅原光聴

大鼓 千葉快俊
小鼓 三浦章興
後見 菅野澄円
北嶺 澄照

能
竹生島
天女 佐々木五大
シテツレ 三浦章興
シテ 佐々木邦世

ワキ 菅野成寛
ワキツレ 菅野康純
間 菅野澄円
大鼓 菅野宏紹
小鼓 千葉快俊
中 菅原光中
後見 佐々木秀厚

古美式三番

五月五日

開口 清水広元

後見 菅野澄円
千葉快俊

能

西王母

シテツレ 佐々木亮王
シテ 佐々木五大

ワキ 菅原光聴
ツレ 菅野康純
ツレ 佐々木秀厚
間 破石澄元

大鼓 菅野宏紹
大鼓 佐々木長生
小鼓 佐々木仁秀
清水広元

能
秋の藤原まつり
中尊寺能
十一月三日

能

経政

シテ 北嶺 澄照

ワキ 菅野成寛

大鼓 千葉快俊
小鼓 佐々木仁秀
清水広元

執務日誌抄

平成十三年十一月二十五日

十四年十一月二十四日

平成十三年

◇十一月

二十五日 交通安全運動推進町民大会

(管財部秀厚 於役場)。

執事長、東山町にて講話

(東山町芸術文化協会二十周年記念式典)。

念式典)。

二十七日 職員研修旅行(第一班) 三日

十日、若狭方面

二十九日 熊野三山協議会一行来山

(執事長案内)。

三十日 執事長、東京へ出張(文化

庁記念物課)。

◇十二月

一日 月次大般若(本堂)

フタバ産業(株)社長来山(参務光中案内)。

三日 NHK東京本局プロデューサー山

本氏来山(貫首・執事長・総務

仁秀応接)。

四日 総務部澄円、福島へ出張(福島・新潟方面)。

七日、観光協会誘客キャンペーン

職員研修旅行(第二班) 七日

五日 総務部快俊、青森へ出張(青森・秋田方面)。

七日、観光協会誘客キャンペーン

六日 天台寺住職瀬戸内寂聴師来山

(山内真珠院に天台寺の副住職就任の依頼あり 貫首・執事長・真珠院澄順・陸奥教区所長光中応接)。

葛飾区郷土と天文の博物館

に出陳の中尊寺文書等合計

七点返却(葛飾区博谷口氏来山、管財澄照立念)。

七日 薬師会(讃衡藏)

九日 金色堂諸仏抜魂法要

十日 金色堂諸仏X線撮影調査

(東北大学教授有賀祥隆氏他) 十日、管財澄照立念

平泉小学校体育館ステージ

緞帳デザイン選定委員会

(執事長 於役場)。

十一日 総務部快俊・澄円、盛岡へ

出張(テレビCM編集のため)。

初詣警備会議(執事長・管財

於西行苑)。

十二日 関東自動車社長と懇談(貫

首・執事長・参務光中 於へり)

十三日 金色堂諸仏入魂法要

十四日 弥陀会(本堂)

本坊表門屋根葺替工事完成。

十六日 お経を読む会(常住院)

十七日 白山会(本堂)

十八日 高館景観委員会（執事長 於役場）。

貫首、名古屋市にて講話（県商工労働観光部主催「企業ネットワーク」）。

二十日 煤払い（マスコミ各社取材）

観光協会役員会（執事長 於役場）。

二十一日 高館橋開通式（貫首・執事長・参務光中）。

同開通式典（於毛越寺レスト）。
文殊会（経蔵）

世界文化遺産登録指導委員会（執事長 於役場）。

二十五日 平泉町文化財センター及川氏来山（大池跡発掘現地説明のため）。

二十七日 ロンドンに出陳されていた「若女面」返却（文化庁伊東史朗氏来山、管財澄照立会）。

東北管内観光キャラバン反省会（総務部快俊・澄円 於観光協会）。

二十八日 恒例御供餅つき
三十一日 午後三時 一山総礼

平成十四年

◇一月

一日 〇時 新年祈禱護摩供修行（本堂）

NHK「ゆく年くる年」の「くる年」で中尊寺生放送



六時 東山町・若水送り着

九時半 正月祈禱護摩（本堂）

十時半 総礼

修正会 釈迦供（本堂）

結衆堂籠り（七日、開山堂）

二日 九時半 正月祈禱護摩（本堂）

修正会 薬師供（峯薬師、讃衡蔵）

十四時 謡初め（庫裡広間）

三日 九時半 正月祈禱護摩（本堂）

修正会 山王供（山王堂）

十一時半 元三会 慈恵供（本堂）

四日 修正会

熊野供（瑠璃光院薬師堂）

五日 修正会

文殊供（経蔵）

大般若会（利生院弁財天堂）

梵焼供（結衆勤、開山堂）

六日 修正会 釈迦供・月山供（釈迦堂）

本日より寒修行（行者四名、町内托鉢）。

七日 修正会 白山十二面供（本堂）

大般若会（本堂）

十四時 修正会 弥陀供（金色堂）

春の祭礼神事能決定

「竹生島」「西王母」

八日 修正会 葉師供(旧關伽堂葉

師、讚衡蔵)一字金輪仏・千

手観音法楽

修正会結願

十三時半 恒例「金盃披き」

九日 新年挨拶回り(盛岡・一関・

平泉 執事長)。

十日 文化観光施設等整備運営委

員会(執事長 於役場)。

文化財防火演習打合せ(執

事長・管財澄照 於平泉レスト)。

横浜市歴史博物館「中世の

棟札」展に出陳のため棟札

三点を搬出(横浜歴史博遠藤氏来

山 管財澄照立会)。

十一日 節分講中会議(執事長・法務

広元他 於泉橋庵)。

十三日 世界遺産講演会(貫首・執事

長・管財澄照 於毛越寺レスト)。

十四日 慈覚会(御影供 本堂)

お経を読む会(貫首)

二十三日 森林施業計画制度説明会

(管財部秀厚 於一関総合体育館)。

二十四日 菊まつり写真コンテスト審

査会(広間)。

二十六日 文化財防火デー

二十七日 音楽劇「円仁」(地藏院・大長

寿院・慎有・積善院・法泉院・長

生・葉樹王院・観音院・安紹・澄

円出演 一関文化C)。

二十八日 安全衛生推進者養成講習会

(二十九日、総務部快俊 於一

関アイ・ドーム)。

観光キャラバン実行委員会

幹事会(総務部澄円 於役場)。

三十日 天台宗ハワイ別院荒了寛師来

山(貫首心接)。

◇二月

一日 月次大般若(本堂)

二日 トヨタ本社副会長池淵浩介氏

夫妻、トヨタ本社常務取締役水

嶋敏夫氏夫妻、関東自動車(株)

社長内川晋氏夫妻来山(貫首

挨拶、執事長案内)。

三日 恒例大節分会。関取琴ノ若

招く。歳男歳女八十二名、

町内園児が豆を撒く。



寒修行満行

四日 東京文化財研究所三浦定俊氏

来山(金色堂保存環境調査のため、

管財澄照立会)。

新聞社七社会(北國・信毎・

神戸その他) 一行九名来山
(執事長案内)。

六日 管財澄照、盛岡へ出張(八日、文化財等取扱講習会 於県立博物館)。

九日 法儀研修会講師天納久和師来山。

十日 法儀研修会(十一日、講師天納久和師 大広間)。

十四日 文化財の火災予防に関する調査研究委員会一行視察のため来山(管財澄照案内)。

十五日 涅槃会御逮夜(本堂) 涅槃会役員会(執事長 於観光協会)。

涅槃会(本堂) お経を読む会(大徳院)

平泉経済同友会新春講演会(執事長・総務部快俊 於岩間会館)。

十六日 規則規程立案委員会(執事長他 応接室)。

西行祭短歌大会打合せ(執事長 於柳之御所資料館)。

執事長、東山町にて講話(両磐地区観光向上研修会「もてなしの心」 職員五名参加 於げいびレスト)。

十九日 平山郁夫画伯『中尊寺一字金輪像』入蔵(貫首・執事長・参拝慎有・管財澄照 讚衡蔵)。

二十二日 観光協会総会(執事長・総務部快俊・澄円 於商工会館)。

二十三日 東北大学有賀祥隆氏、福島県立美術館長、福島民報社社長来山(「東北の美」 出展依頼のため 執事長・管財澄照応接)。

讚衡蔵運営委員会(執事長・参務光中・金色院執事澄順・弘文研澄元・弘文研成寛・管財澄照・役席光聴 讚衡蔵会議室)

二十四日 管財澄照、東北歴史博物館他へ出張(平泉町世界文化遺産登録推進協議会研修会)。

菊づくり講習会(講師 川崎福司氏 大広間)。

二十五日 東雲寺住職山田亮清師他五名来山(貫首講演についての依頼)。

二十六日 町観光審議会(執事長 於役場)。

岩手日日文化賞贈呈式(執事長 於Hサンルート)。

二十七日 観光ボランティアガイド講習会(講師 執事長「中尊寺・柳之御所遺跡について」 於役場)。

二十八日 県史跡整備市町村協議会文化財行政担当職員研修会一行来山(管財澄照案内)。

平泉・高館環境検討委員会(執事長 於JAIわて南)。

◇三月
一日 月次大般若(本堂) 観光協会企画宣伝部会(総務部澄円・管財部秀厚 於毛越寺レスト)。

二日 執事長、盛岡にて講話(盛

岡クラブ 於Hメトロポリタン盛岡。

三日 平泉文化フォーラム(貫首・執事長他 於毛越寺レスト)。

四日 讚衡藏運営委員会(執事長・参務光中・管財澄照他 讚衡藏会議室)。

五日 福島県博小林氏来山(六日、漆工品調査のため)。

九日 執事長、仙台へ出張。

十日 一山協議会(広間)。

十一日 執事長、管財澄照、仙台へ出張(聖教類・古文書搬入のため 於仙岳院)。

十二日 菊まつり役員会(執事長・春興 於広間)。

十三日 一切経軸端調査(東博加島勝氏・京博久保智康氏来山(十六日、管財)。

横浜市歴史博物館「中世の棟札」展出陳の棟札三枚返却(横浜歴博遠藤氏来山、管財澄

照立念)。

十六日 陸奥教区所長光中、仙台へ出向(光円寺名誉住職四重真永師密葬 於光円寺)。

十八日 貫首、本堂にて法話(社岩手経済同友会一行五〇名)。

十九日 基衡公御月忌(胎曼供 本堂お経を読む会(利生院)

定例一山会議(大広間)

二十日 平泉をきれいにする会花壇コンクール表彰式(管財 於役場)。

西行祭実行委員会(執事長・総務 於一関蔵日)。

二十一日 春彼岸会法要(法華三昧)

二十二日 山内法泉院法事(本堂)

二十三日 光円寺住職四重真永師本葬儀(貫首他十名出向 於光円寺)。

二十四日 開山会護摩供(本堂) 山内観音院法事(本堂)

増田知事を囲む夕べ in 一関

(貫首・執事長他)。

二十五日 執事長、仙台へ出張(第五回仙台青葉能実行委員会 於仙台河北新報社)。

景観形成推進委員会(管財澄照 於役場)。

二十六日 執事長、京都へ出張(二

十七日、宗典編纂所関係)。

教区布教研修会(貫首他 於毛越寺)。

総務部澄円、盛岡へ出張(CM制作立念)。

水道事業業務委託契約(管財部秀厚 於毛越寺レスト)。

二十七日 総務仁秀、盛岡へ出張(寺院規則申請)。

衆議院事務局管理部管理課田嶋泰子氏、小野和子氏、森下さつき氏来山(建築物管理に

関する視察、管財澄照案内)。

東下り行列保存会総会(総務 於滝沢魚店)。

二十九日 山内真珠院法事（自坊）
三十日 執事長、衣川村にて講話
（電機連合岩手 於衣川荘）

平山郁夫画伯『中尊寺一字
金輪像』展示記者発表（報
道関係者来山 広間）

三十一日 貫首、石巻市にて講話（石
巻市東雲寺青年会 執事長他八名
出向 於東雲寺）

◇四月

一日 月次大般若（本堂）
二日 参拝慎宥、東京へ出張（日本
美術院展覧会）

貫首、御修法出仕のため本
山へ出向（十二日）

観光協会役員会（執事長 於
観光協会）

五日 花まつり打合せ（法務広元他
於こまつ寿司）

六日 陸奥仏教青年会総会（広間）

八日 仏生会（本堂）
お経を読む会（円教院）

十日 源義経公東下り行列記者発
表（執事長 於泉橋庵）

十一日 世界文化遺産登録推進協議
会役員会（管財澄照 於役場）
観光キャラバン実行委員会
（総務仁秀・澄円 於役場）

十三日 陸奥教区寺院婦人会定例総
会（執事長 於泉橋庵）
十四日 恒例花まつり



十五日 境内整備基本構想諮問委員
能申合せ（大広間）

会（執事長・参務秀圓・参務光
中・金色院執事澄順・総務仁秀・
管財澄照 応接室）

十六日 菊まつり協賛会総会（貫首
他 大広間）

十七日 観音講（山内観音院）

十八日 ボランティアガイド実践講
座（貫首法話「ボランティアにつ
いて」 執事長法話「中尊寺を歩
く」）
弁慶力餅競技保存会総会
（総務部澄円 於泉そば屋）

十九日 春の藤原まつり警備会議
（執事長・総務・管財 於西行苑）

二十日 新中尊寺総代規約説明会
（広間）

二十一日 能申合せ（能楽堂）

二十二日 衣関桜友会清掃奉仕・観桜
会（執事長・管財澄照・秀厚）

薪能役員会（執事長）

二十三日 一関警察官友の会理事會
（執事長 於一関警察署）

西磐井郡市仏教会総会（法務広元 於一関あつちい屋）

一山協議会（広間）

二十四日 教区・一隅理事会（大広間）

二十五日 観光協会役員会（執事長 於観光協会）

黄金王国推進委員会総会

（総務快俊 於一関アィドー）

総代会総会（執事長他 於平泉レスト）

かんざん亭二階学習ホール

使用開始。

二十七日 平山郁夫画伯来山。

平山画伯『中尊寺一字金輪像』公開開眼法要（讚衡蔵）

世界文化遺産講演会（講師

平山郁夫画伯 貫首・執事長他 於平泉小学校体育館）。

二十九日 西行法師追善法要（本堂）

第二十三回西行祭短歌大会

（講師 尾崎左永子氏）

貫首賞「紙芝居の拍子木に

似て明日伐らん杉たたきゆ

く人の影みゆ」（長栄つや 金成町）

成町）

貫首、埼玉県にて講演（埼玉教区一隅を照らす運動推進大会

随行章興 於埼玉県坂戸市文化会館）。

◇五月

◇五月

一日 春の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児行列、常の如し。

郷土芸能奉演（胆沢町柳田念佛剣舞）

開山護摩供（開山堂）

二日

テレビ岩手社長中野士朗氏来山（執事長応接）。

東下り行列主要役者レセプション（執事長・管財澄照 於H武蔵坊）。

郷土芸能奉演（平泉町赤伏神楽、達谷毘沙門神楽）

源義経公東下り行列（義経

公役・俳優の斎藤祥太）

郷土芸能奉演（衣川村川西子

供剣舞）

四日 古実式三番

神事能「竹生島」

郷土芸能奉演（平泉町行山流長部鹿踊、胆沢町行山流都鳥鹿踊、胆沢町朴ノ木沢念仏剣舞）

五 日 古実式三番

神事能「西生母」

郷土芸能奉演（達谷毘沙門子

供神楽、江刺市行山流角懸鹿踊）

六 日 山王講（山王堂）

反省会（参務秀圓 於滝沢魚店）。

十日

一関警察官友の会総会（執事長 於ベリーノH）。

和賀公民館へ中尊寺ハスを株分け。

十一日 丸卓建設五十周年記念祝賀会（執事澄順 於花巻温泉）。

十四日 執事長、一関市にて講話

(一関市働く婦人の家の春季定期
講座 於一関市働く婦人の家)。

十五日 貫首、東京へ出向(大正大学
七十周年記念式典 随光聴 於
東京プリンスH)。

十六日 執事長、本堂にて法話(J
TB盛岡「全日本広告連盟」一行
六〇名)。

岩銀会長齊藤育夫氏他各地
銀会長来山(貫首応接・執事長
案内)。

十七日 岩手工事事務所副所長阿部幸雄
氏来山(貫首応接)。

西磐井郡市仏教会理事会
(法務広元 於ダイヤモンドP)。

商工会青年部通常総会(総
務部快俊 於商工会館)。

十八日 第五回仙台青葉能(貫首 於仙
台市民会館)。

十九日 お経を読む会(地藏院)

二十一日 観光キャラバン打合せ(総
務部澄円 於観光協会)。

平泉菊花会総会(春興 於泉
そば屋)。

二十二日 酒田三十六人衆鏡谷誠一氏来
山(貫首応接 茶室)。

西磐井郡市仏教会会長来山
(貫首講演の件にて 貫首応接)。

二十三日 観光キャラバン実行委員会
総会(執事長・総務仁秀・澄円
於役場)。

平泉商工会総会(執事長 於
商工会館)。

二十七日 西磐井地区植樹祭(管財部秀
厚 於平泉字大沢地内)。

二十八日 東北銀行会社説明会(総務
部澄円 於ペリーノH)。

紫波町五郎沼薬師神社へ中
尊寺ハスを株分け。

二十九日 県観光協会評議員会(執事
長 於盛岡H東日本)。

三十日 観光社訪問挨拶検討会(総
務部快俊・澄円 於役場)。

三十一日 平泉をきれいにする会総会

(管財部秀厚 於役場)。

陸奥教区第二部檀信徒会総
会(光中・澄順・慎有・仁秀・成
寛・広元・総代長他 於毛越寺)。

トヨタ自動車「佐京会」四
名、関東自動車一名来山
(執事長案内)。

◇六月
一日 月次大般若(本堂)



6月1日夕刻の局地的大雨で
東物見台下の斜面が大きく崩れた

中尊寺杯ゲートボール大会

開会式（執事長）。

執事長、かんさん亭にて法話（日本カロライズ工業㈱）。

夕刻、山内に局地的大雨。

二 日 中尊寺杯ソフトテニス大会
（総務仁秀 於町営テニスコート）。

岐阜県白鳥町町長他来山。

三 日 讚衡藏収蔵室燻蒸（～五日）。

四 日 伝教会（御影供 本堂）

芭蕉祭全国俳句大会打合せ

（総務部快俊 於役場）。

五 日 社団法人日本観光協会主催

講演会（総務部快俊・澄円・光

聴 於盛岡グランドH）。

総合福祉センター整備委員

会（参務秀圓 於役場）。

JTB社員研修一行二二名

来山（総務仁秀案内）。

六 日 執事長、東山町にて講話

（於東山松川公民館六十名）。

九 日 法華経一日頓写経会（本堂）

紺紙金銀字交書経一巻、植

村和堂氏より奉納。

十日 西磐井郡市仏教会理事會
（法務広元 於ダイヤモンドパ
ルス）。

十一日 観光協会役員会（執事長 於
観光協会）。

平泉総社御輿奉賛会総会
（執事長 於役場）。

十三日 貫首、新潟県にて講演（天
台宗布教師連盟関東信越地区協議
会 隨行章典 於越後湯沢市）。

執事長、盛岡にて講話（盛

岡ユネスコ協会「歴史に聞く 十

二世紀と二十一世紀」於盛岡H東
日本）。

十五日 西行祭役員反省会（総務仁

秀・快俊他 於一関文化C）。

紫波町五郎沼薬師神社「古

代蓮里帰りを祝う会」（管財

澄照 於盛岡南ショッピングC）。

十六日 貫首、一関市にて講話（西

磐井郡市仏教会「五十周年記念式

典」法務・総代出席 於ダイヤ

モンドパレス）。

十九日 一切経軸端調査（東博加島勝
氏・京博久保智康氏来山 ～二十

二日、管財）。

二十日 自在坊蓮光忌法要（本堂）

植村和堂氏奉納金銀字経披
見（広間）。

二十一日 管財澄照、総務部澄円、仙台
へ出張（デジタルミュージアム
セミナー）於仙台国際C）。

「社会を明るくする運動」

実施委員会（執事長 於役場）。

二十二日 総務部快俊、仙台へ出張

（インターネットの著作権につい
て）他 於仙台国際C）。

一関・平泉・花泉小中学生「世

界遺産塾」一行来山（管財

澄照対応、かんさん亭他）。

二十三日 平泉町消防演習（管財澄照

於観自在王院）。

貫首、本堂にて講話（佐野

市東ロータリークラブ一行一八名。

二十四日 日本電信電話ユーザー協会

講演会（総務部快俊 於Hサン
ルート）。

二十五日 花巻市立笹間第二小学校拝

観（成寛法話 かんざん亭）。

貫首、水沢市にて講演（財

日本河川協会「河川文化を
語る会」（随行澄照 於プラザイ
ン水沢）。

執事長・総務部澄円、東京

へ出張（二十六日、県観光協

会観光客誘致説明会 於Hエドモ
ンド）。

平泉をきれいにする会（国

道四号線周辺の清掃 管財部秀厚）。

二十七日 テレビ岩手制作スタッフ佐藤氏、

白田氏、澤藤氏他五名来山

（執事長・管財・法務・総務部澄

円応援）。

二十八日 讚衡蔵運営委員会（執事長・

参務光中・管財澄照他 讚衡蔵会

議室）

二十九日 芭蕉翁追善法要（本堂）

芭蕉祭俳句大会（大広間）

◇七月

一日 月次大般若（本堂）

総合福祉センター整備委員
会（参務秀圓 於役場）。

四日 文殊菩薩X線調査（東北大教

授有賀祥隆氏他 六日、管財澄
照立会）。

五日 水かけ神輿警備会議（管財

部秀厚 於商工会館）。

六日 貫首、青森県にて講演（陸

奥教区一隅大会 於中里町総合文
化Cパルナス会館）。

七日 紫波町箱清水公民館一行来

山（管財澄照案内）。

八日 日本テレビ「ズームイン

スーパー」中尊寺より中継。

九日 総務部澄円、群馬へ出張（

十二日、町観光キャラバン 於群
馬・長野方面）。

十日 台風六号により山内に被害

発生。

十一日 貫首、盛岡にて講演（東北

七県教育委員会連合会 随行快俊
於盛岡市民文化ホール）。

十二日 県観協教育旅行誘致宣伝部

会幹事会（総務部快俊 於盛岡
農林会館）。

水かけ神輿打合せ（管財部秀
厚於役場）。

十三日 黄金荘創立十周年記念式典

並びに祝賀会（春興）。

十四日 如法写経十種供養会、頓写

法華経奉納式。

平泉町名誉町民（国宝金色堂

解体修理委員長）藤島亥治郎

氏逝去（享年百三歳）。

十六日 フタバ平泉新社社長竹内征洋氏

来山（貫首応援）。

十七日 清衡公御月忌（胎曼供 本堂）

十八日 清和書道会会長植村和堂氏逝

去

十九日 山形立石寺郷土研究会一行

八名来山（執事長案内）。

二十日 富岡八幡宮神輿連合会一行

四〇名来山（執事長挨拶）。

水かけ神輿・宵宮

富岡八幡宮神輿連合会との

交流会（執事長 於日武蔵坊）。

二十二日 平泉総社神輿渡御



二十二日 貫首、東京へ出向（植村和堂

氏葬儀 澄元・澄円 於東京都荒

川区畜場）。

岐阜県白鳥町議会一五名来

山（史跡保存整備の事例研修 管

財澄照案内）。

二十三日

文化庁伊藤信二氏来山（金銀

装舍利壇調査のため 管財澄照立

二十四日

大文字まつり警備会議（執

事長・管財部秀厚 於西行苑）。

二十五日

世界文化遺産登録指導委員

会（執事長 於役場）。

二十六日

裏千家青年部来山（貫首へ茶

掛依頼の件）。

二十七日

北銀ふるさと大学松尾八幡

平校五九名来山（参拝慎有法

話 かんさん亭）。

韓国東国大学理事長呉仁甲氏他

九名来山（執事長案内）。

鈴木寛氏（消防）叙勲祝賀

会管財部秀厚 於毛越寺レスト）。

二十八日

山内薬樹王院法事（本堂）

蓮文化研究会一行二〇名来

三十一日

毛越寺貫主藤里慈亮師遷化。

◇八月

一日 月次大般若（本堂）

二日 毛越寺貫主藤里慈亮師火葬

三日 町観光レクリエーション客

動態調査（観光商工課・観光協

会職員 山内）。

陸奥教区布教師会任命伝達

式・研修会（於毛越寺）。

四日 毛越寺貫主藤里慈亮師通夜

（執事長・光中・澄元 於毛越寺）。

十五日 境内清掃奉仕（衣関校友会

開山堂付近）。

五日 紫波町五郎沼へ株分けした

中尊寺ハスが開花。

七日 夏安居（結衆勤 開山堂）

七 日 夏安居（結衆勤 開山堂）

執事長、東京へ出向（故藤島亥治郎先生弔問）。

大文字まつり担当者打合せ会（法務広元 於こま「寿司」）。

八日 平泉をきれいにする会「ゴミの持ち帰り運動実施」
（管財 於平泉前沢インター）。

十日 梵焼供（結束勤 常の如し）

十四日 第二十六回中尊寺新能
能「二人静」（内田成信師）

狂言「狐塚」（野村萬齋師）
半能「岩船」（佐々木宗生師）

十五日 平泉町成人式（執事長）
ふるさと平泉会総会（執事長 於H武蔵坊）。

山内大徳院住職佐々木賢宥師遷化。

十六日 第三十八回平泉大文字まつり

十七日 大徳院賢宥師火葬（釣山齋苑）

十九日 大徳院賢宥師通夜（自坊）

二十日 県主催札幌市中学校教育旅行現地研修一行来山（総務

部澄円案内）。

大徳院賢宥師葬儀（本堂）



在りし日の賢宥師

二十二日 岩手放送社長菊池昭雄氏来山
（カナダ大使夫妻来山の打合せのため 貫首・執事長・総務応援）。

名古屋・岐阜産業人視察来山（春興案内）。

二十三日 平泉をきれいにする会花壇
コンクール（管財部秀厚 於役場）。

大施餓鬼会御逮夜（本堂）

二十四日 大施餓鬼会・放生会（本堂）

二十五日 陸奥教区法要習礼（陸奥教区所長光中他宗務関係者出向 於仙

台光円寺）。

紫波町蜂神社祭礼（法務広元）

二十六日 執事長、町内にて講話（平

泉漆文化セミナー 貫首・管財澄照出席 於H武蔵坊）。

藤島亥治郎先生を偲ぶ会実行委員会（総務仁秀 於役場）。

二十七日 観光パンフレットに関する打合せ会（総務部澄円 於役場）。

二十八日 一関信用金庫「経済講演会」
（総務部澄円 於ベリーノH）。

岩大助教伊藤菊一氏中尊寺ハスの調査に来山（管財対応）。

福島県立美術館「東北の美」展に出陳のため金字経等合計十二点を搬出（福島県美宮

武氏他来山、管財澄照立会）。

二十九日 盛岡厨川中学校生徒校外学習（春興）。

花巻・遠野・平泉観光推進協議会主催首都圏教育旅行現地研修会来山（総務部澄円案内）。

近畿日本ツーリスト県教育旅行

視察意見交換会（総務仁秀・快俊 於盛岡繁温泉）。

中尊寺門前会研修会（貫首・

執事長・澄照・職員五名参加 於

讚衡藏・かんざん亭）。

三十日 泉博大矢邦宣氏他二名来山

（貫首応接 茶室）。

首都圏旅行者現地研修会

情報交換会（総務部澄円 於花

巻温泉H紅葉館）。

三十一日 龍玉寺施餓鬼会（仁秀参席）

貫首、五木寛之先生を囲む

夕べに招かる（於ヘリーノH）。

◇九月

一日 月次大般若（本堂）

山形瀨見温泉亀割観音例祭

（田教院快恩参席・随行光聴）

陸奥教区法要習礼（陸奥教区

所長光中他宗務関係者出席 於光

円寺）。

二日 貫首、本堂にて法話（県警

察学校生徒三〇名）。

三日 泰衡公御月忌（金曼供 本堂）

天台宗ハワイ別院住職荒了寛師

来山（貫首・執事長応接）。

総合福祉センター整備委員

会（参務秀圓 於役場）。

七日 国土交通省胆沢ダム工事事務所関

係者東京大学小澤一雄氏、東

北地方整備局河川部渥美雅裕氏

他来山（執事長案内）。

東北仏青総会（八日、山内

仏青会員出席 於花巻温泉H千秋

園）。

執事長、一関市にて講話

（警察官友の会設立十周年記念式

典 於ダイヤモンドパレス）。

執事長、東京へ出向（十三

三日、大正大学文化財講座集中講

義）。

十日 毛越寺貫主藤里慈亮師本葬

儀

十二日 貫首、本堂にて法話（朝日

旅行会「日本の宿を守る会」一六

名）。

十三日 国土交通省懇談会（貫首出席

随行澄照 於ヘリーノH）。

十四日 五郎沼薬師神社例祭（仁秀

参席）。

十五日 カナダ大使夫妻来山（貫首

案内）。

平泉町敬老会（執事長 於平

泉小学校体育館）。

十六日 いっくら国際文化交流会一

七名来山（春興案内）。

陸奥教区法要・彼岸会四個

法要（陸奥教区所長光中他宗務関

係者出席 於仙光円寺）。

江刺市経清公命日祭（貫首出

席 於餅田会館）。

いっくら国際文化交流会懇

親会貫首・春興 於いっくら園）。

十七日 毛越寺執事長御礼挨拶来山

（貫首・執事長）。

十八日 総務部快俊、札幌へ出張

（二十日、県修学旅行誘致説明

会 於日ニューオータニ札幌。

十九日 赤堂稻荷例祭（護摩供）

讚衡藏運営委員会（執事長・

管財澄照他 讚衡藏会議室）

二十一日 國學院大學倉林正次先生喜

寿・勲三等瑞宝章受賞祝賀

会（弘文研澄元 於明治記念館）。

二十三日 秋彼岸会法要（常行三昧）

お経を読む会（真珠院澄円）

平山郁夫画伯『中尊寺一字

金輪像』抜魂法要（讚衡藏）

二十四日 讚衡藏第一回館藏品展「中

尊寺の三種一切経」はじま

る（十一月二十四日）。



金銀字經書写奉行自在房蓮光

職員研修旅行（第一班）二十

十五日、比叡山・三千院・石山寺

他（総務部澄円同行）。

二十五日 岩谷堂史跡保存会来山（貫

首応接）。

二十六日 「総合福祉センター施設」

に係る先進地視察（参務秀圓

於宮城県瀬峰町・金成町）。

貫首、盛岡にて講話（東北

青色申告会東北ブロック大会 随

行快俊 於篤宿温泉「日森の風」。

二十七日 執事長、東京へ出向（仏教

文化学会）。

二十九日 大徳院四十九日法事（本堂）

◇十月

一日 大般若（本堂）

泉橋庵高橋文英氏写経机奉

納（執事長応接）。

職員研修旅行（第二班）二十

日、参務秀圓同行）。

町社会福祉大会第十回記念

大会（春興 於日武蔵坊）。

市町村合併を考える各種団

体との懇談会（執事長・総務

於役場）。

台風二十一号により金色堂

前の老杉一本が倒れるなど

の被害が発生。

二日 慈眼会（本堂）

菊まつり役員会（広間）。

三日 出光興産関係者十名来山

（貫首案内）。

総務部快俊、東京主張（県修

学旅行誘致説明会 於Hエドモン

ド）。

四日 平泉町遺族会戦没者追悼式

（春興 於毛越寺）。

五日 平泉町民号（七日、執事長

和歌山田辺市方面）。

江刺「はむらの会」研修旅

行（七日、貫首・慎有 於比叡

山・三千院）。

十日 本坊表門附属塀改修完成。

十一日 観光協会役員会（執事長）。

十二日 一隅を照らす運動陸奥教区

托鉢（町内、貫首他出向）。

十三日 第十回黄金祭（参務光中 於黄金荘）。

執事長、本堂にて法話（淨

法寺町婦人会二〇名）。

一隅理事会（広間）

大正大学学生一五名參觀

（執事長案内）。

十五日 樹木医神山氏金色堂周辺樹

木の緊急樹勢診断のため来

山（台風による被害が出たことに

即応して 管財澄照・秀厚立念）。

観光キャラバン実行委員会

（総務部澄円 於役場）。

十六日 県南ブロック消防団長会議

視察研修一行三〇名来山

（管財澄照案内）。

ジパングフルムーン秋の東

北一行一二名来山（公文研成

寛話話 かんさん亭）。

岩手日報社達下支社長来山

（貫首応接）。

十七日 総務部快俊・澄円、仙台へ

出張（JR仙台支社打合せ）。

坂下交差点説明会（管財澄照

於二区公民館）。

十八日 貫首、福島県阿津賀志山へ

出向（随行成寛）。

藤島先生を偲ぶ会打合せ会

（執事長 於役場）。

十九日 白虎堂例祭（山内薬樹王院）。

二十日 菊まつり開幕法要

お経を読む会（願成就院）

二十一日 川嶋印刷社長菊地慶矩氏写経

机奉納（執事長・法務応接）。

福島県立美術館へ出陳され

ていた金字経等合計十二点

返却（福島県美宮武氏他来山、管

財澄照立念）。

二十二日 貫首、京都へ出向（妙法院前

門主大久保良順大僧正米寿を祝う

会 随行光聴 於ウエスティン都

日京都）。

平泉駅前歓迎塔についての

検討会（執事長 於役場）。

二十三日 執事長、本堂にて法話（日

本旅行一七〇名）。

円福寺様一四名団参（福島

教区寺院婦人会 宏紹案内）。

能申合せ（大広間）

二十四日 阪神道路公団理事長佐藤信彦

氏、国土交通省東北地方整備局副

局長長沢小太郎氏来山（参務

光中案内）。

執事長、一関市にて講話

（一関市納税貯蓄組合連合会五十

周年式典 於一関文化C）。

町観光協会企画宣伝部会

（総務部澄円 於曲水亭）。

二十五日 日本電設工業会五〇名来山

（貫首応接 本堂）。

二十六日 岩手県南史談会五十周年式

典（記念講演（執事長 於第二平

野ビル）。

ユネスコ運動岩手大会（貫

首、執事長他於(日武藏坊)。

二十七日 藤島先生追善回向法要(本堂)

堂)

文部科学政務官池坊保子氏他
来山(貫首挨拶・執事長案内)。

藤島先生を偲ぶ会(貫首・執

事長他出席 於平泉文化史館)。

二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)

横浜日吉曹洞宗保福寺様三

〇名团参(参務光中法話 本堂)。

三十日 能申合せ(能楽堂)

三十一日 貫首・執事長、東山町へ出

向(台風六号被害救援募金届ける)。

◇十一月

一日 秋の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児

行列、常の如し。

郷土芸能奉演(平泉町赤伏神

楽、胆沢町柳田念佛剣舞)

二日 菊供養会(本堂)

倉町遺跡発掘現地説明会

(執事長 於町内倉町)。

郷土芸能奉演(胆沢町行山都

鳥鹿踊、一関市市野々小学校鶏舞)

三日 町産業文化祭(執事長 於役

場)。

中尊寺能「経政」(能楽堂)

平泉町花壇コンクール表彰

式(管財部秀厚 於保険センター)。

郷土芸能奉演(平泉町達谷毘

沙門神楽)

四日 北東北国際観光テーマ地区推進協

議会主催台湾旅行エージェ

ント他一八名来山(総務部澄

巴)。

五日 日光観音寺様一行来山(貫

首応援・案内)。

貫首、本堂にて法話(栃木

県共同高等産業技術学校)。

六日 東北新幹線「はやて」試乗

会(総務部快俊 於盛岡駅)。

貫首、本堂にて法話(日光

参拝団一行三〇名)。

八日 番組製作会社社長会備前島氏一

行一〇名来山(章典案内)。

栃木県鹿沼市医王寺様一行

八名来山(貫首挨拶 本堂)。

九日 県青年国際交流機構主催ボイス

フォーラム二〇〇二in平泉

(管財澄照・総務部快俊 かんざ

ん亭)。

執事長、石川県へ出張(

十日 奥の細道サミット 於石川

県山中温泉)。

十日 如法写経十種供養会(本堂)

菊まつり表彰式(大広間)

貫首、一関市にて講話(岩

手日報広華会狂言の会 随行澄円

於一関文化C)。

十二日 平山郁夫画伯『慈光』(中尊

寺金色堂)入蔵(貫首・執事長・

参拝慎有・管財澄照立念)。

十三日 岩手日報一関支社長他二名

来山(十日の講話御礼 貫首・執

事長応援)。

十四日 文化庁建造物課上野氏及び

十六日

県・町教委担当者来山（能楽堂・本坊表門・旧法泉院庫裡視察（執事長・管財澄照））
貫首・執事長、山形県へ出向（十七日、平泉町観光協会研修旅行 於山形県酒田市）。



平泉建築組合創立五十周年記念式典・祝賀会（管財澄照 於日武蔵坊）。

十九日

樹木医神山氏金色堂周辺樹木の内五本を再度樹勢診断するため来山（管財部秀厚立念）。

二十日

執事長、大阪へ出張（二十一日、町観光ギョーラン 大阪・名古屋方面）。

二十一日

栃木生涯学習文化財団副理事長・事務局長他四名来山（貫首心接、管財澄照案内）。

二十三日

貫首、盛岡市にて講演（県立病院医師連合会四十周年式典 随行宏紹 於日メトロポリタン盛岡）。

二十四日

天台会御逮夜（結衆勤 本堂）。天台会厳修（御影供 本堂）。北坂上り口地藏尊抜魂法要（町道拡幅による移設のため 大長寿院光中・執事長・管財澄照・宏紹）。



金色堂前の危険木処理作業のようす（12月3日）記事は9ページに

御奉納者 御芳名

平成十三年十一月九日～平成十四年十一月十日

一、紺紙金銀字交書経「方便心論」一巻

東京都 植村和堂 様

一、多羅葉 三本

花泉町 千葉達夫 様

一、写経机 二十五脚

一関市 川嶋印刷(株) 様

一、写経机 二十五脚

平泉町 (有)泉橋庵 様

一、打敷・香炉他

一関市 (有)法輪 様

一、御供餅米 五斗

衣川村 千葉卓治 様

奉納

平成十四年二月十九日

日本画 (50号)

「中尊寺一字金輪像」

平成十四年十一月十二日

日本画 (50号・春の院展出品)

「慈光」(中尊寺金色堂)

平山郁夫 様



浄財御奉納者 御芳名

西念寺様	六万円	佐野東ロータリークラブ様	五万円
東広島市 龍玄院様	七万五千元	一関信用金庫平泉支店様	三万円
岩手県立博物館友の会様	四万円	日光市 今井きくえ様	五万円
瀬戸内寂聴様	十万円	飯野勝衛様・星野清子様	五万円
菅原晴雄様・鈴木良一様	十万円	京都市 實光院 天野久和様	三万円
(有)平泉観光写真社様	五十万円	栃木県 城興寺様	五万円
大慈寺様	三万円	仙台市 佐々木アキコ様	三万円
山田 雪様	三万円	浄土宗岩手教区教務所様	五万円
関東自動車(株)様	五万円	清和書道会様	十万円
北海道 天祐寺様	五万円	餅田史跡保存会様	三万円
岩手経済同友会様	五万円	浄法寺町教育委員会様	三万円
東雲寺様	十五万円	「東北の美」展実行委員会様	三十万円
岩手銀行 会長 斉藤育夫様	五万円	福島教区寺庭婦人会様	三万円
紫波町 五郎沼薬師神社様	五万円	社団法人日本電設工業協会様	三万円
寶福寺様	十万円	東京都 藤島幸彦様	五万円

不動尊篤信御奉納者御芳名

平成十三年十一月～平成十四年十月

青森県 七戸町	盛田悠三様	七万三千元	一関市	平泉中学校昭和六十年卒業生様	七万円
青森県 平賀町	(喜世念) 小笠原喜世様	八十四万三千元		平泉中学校昭和六十一年卒業生様	五万円
青森県 南部町	工藤銀四郎様	季毎御供物		(株)精茶百年本舗 清水恒輝様	三万円
青森県 岩木町	笹隆治・哲子様	一万三千元 季毎御供物	宮城県 仙台市	山平様	三万円
秋田県 大曲市	ベル美容室 高橋紀美世様	四万円 御供物		(有)ケーテック(代表) 芦菅敬一様	五万四千元
二戸市	米沢励様	季毎御供物	宮城県 仙台市	(有)豊隆軌道 千葉幸八様	六万円
滝沢村	斉藤實様	三万四千元		(株)阿部礦産様	三万円
宮古市	槻川原光昌様	三万五千元	宮城県 仙台市	沼田とも子様	三万七千元 季毎御供物
北上市	高橋喜徳郎様	三万円	山形県 寒河江市	川熊武芳様	七万八千元 献酒
大東町	中川富也様	四万円	福島県 郡山市	小山利男様	四万五千元
室根村	(株)シューアーエンジニアリング様	三万円	東京都 板橋区	J A さがえ村山旅行センター様	六万九千元
平泉町	(有)千葉製材所様	五万円 献酒	東京都 新宿区	(株)スタンドサービス (代表) 吉田幹夫様	三万円
	川嶋印刷(株)	十万円	東京都 京都市	和泉元彌様	五万円
	一関信用金庫平泉支店様	三万円	大阪府 和泉市	中村武司様	三万円
				(株)大福興業(代表) 大島和彦様	三万円
				(株)セントラル服部会様	四万五千元
				辻林正博様	六万円